

## 床の間のこと

床の間の花の置き方について基本的なことをまとめてみる。



右の写真は私の家の茶室の床で、床柱の右に床があるので上座床（本勝手の床）である。床柱の左側に床があれば下座床（逆勝手の床）になる。



床柱の右に床があるので上座床（本勝手の床）である。床柱の左側に床があれば下座床（逆勝手の床）になる。

座）に花を置き、上座に座った客が花をゆつくりと観賞できるようになり先ほどの考え方とは逆になる。また現代では明かり口が無かつたり幅の狭い床も多く、花の位置は床の大さや花の大きさ、花型によって柔軟に考えて飾ればいいだろう。右か左かは置いておくとして、床の間に花を飾る場合の心得を書いておこう。

掛け物には横物（横軸）と堅物（立軸）のふたつがあり、横物のときは掛け花か、軸の下（床の中央）に花を置く。堅物ならば花は脇へ譲って置くのが基本である。

また掛け物に書かれた花をいけることは避け、人物が描かれていればその顔に枝がかからないように、名や印を隠さないように注意する。

置花生は畳床には薄板を敷き、板床ならば直に置く。

「本床」は床柱には面取りした角材を用い、床框は床柱と其木の漆塗りで付書院があり、床脇に違い棚がある。

この本勝手の床には本勝手の花を床柱に寄せていけるのが一般的である。（右の若松と椿の生花のように）もともと床には床柱と対側に書院が付いていて、外の光を障子越しに取り込む明かり口の役目があり、床柱側に花を置いた方が明かりを受ける形になつて收まりも良い。

ただし、その逆に明かり口側（上

さらに茶道では掛け軸のほかに香炉や香合を飾ったときは花入れを置かない決まりがある。

## 鴨色

仙溪

日本で野生の鴨が姿を消してから十年が経つ。以前は日本各地に飛来していたので、「鴨色」という色名が鴨が羽を広げたときに見える風切羽の薄紅色からきているのを知る人も多かつただろうが、恥ずかしながら私は鴨色がいつたいどんな色かも知らなかつた。

先日の名古屋での稽古の時にSさんが庭に咲いた牡丹の色が鴨色なのだと教えてくださり、別人は若い女性の小袖に鴨色が多いという話をされていて、なんとなく可愛い明るいピンク色を想像することができた。

調べてみると江戸時代の染色指南書「手鑑模様節用」に「とき羽色一名志のめいろ」とあって、東雲色と同色であるとされている。また一葉草四迷の「浮雲」には十八才のお勢が黄八丈の小袖に藍鼠の帶、帶上に時色縮緬という姿で菊見に出かける様子が書かれている。「時色（鴨色）」や「藍鼠」という色がどんな色なのか、「黄八丈」がどんな織物なのか知っている人はどれくらいなのだろう。日本の伝統文化から色名が消えてしまつては楽しみが半減してしまう。色名の原点は染色にあり、着物文化で次の世代に引き継いでいかねば消えてしまう。

日本から野生の鴨は消えてしまつたけれど、色名としては残つていつてほしい。



## ビッグダイシュー日本版

### 「生き残りのしくみ」②

植物が動物を養っている、といつても食べつくされては困るので、植物それぞれに独自の工夫をして自己防衛をしている。「渋み」「辛み」「苦み」「えぐみ」「酸み」などもその自己防衛の現れだ。

例えば柿の実は中のタネができるまで虫や鳥には食べられないよう、「渋み」をもつていて。やがてタネができると「渋み」は無くなつて甘くなる。

「タデ食う虫も好き好き」というように、たとえ辛いタデを好んで食べる虫がいるとしても、植物も動物も、それぞれに棲み分けをして好みを分散することで生きていけるのだ。

「競争したらどちらかが滅んでしまう。生物はちょっとだけでも嗜好が違うと、どこかで生きていけるんですよ。」（田中修先生）

### 病気への生き残り戦略

#### 多様な子孫を残すこと

桜餅の甘い香りのもとは、虫を退するためにはさくらが用意したクマリンという物質である。サクラの葉にはクマリンになる前の物質と触媒

になる物質が別々に存在していて、虫がかじることでこの二つの物質が出会い、反応が進んでやがて香りが出る。

でてくる仕組みになつていて。

他にもクスノキの葉を傷つけると芳香を放つことはよく知られていく。（防虫剤に利用・樟脑）

またマツやヒノキなどの針葉樹はカビや病原菌を遠ざけるために香りを放つていて。私たちはそれを爽やかな香りとして感じて「森林浴」を楽しんでいる。このような植物が放つ香りは総称として「フィトンチッド」と呼ばれている。

「植物は突然変異を繰り返し、ここまで進化してきた。ある植物の原産地を調べると、その種が生きられるぎりぎりの環境であることが多い。ヒノキもあの香りを出したから原産地で生き残ってこられたんだと思う。その後人間があちこちに移植して増えたわけです。」（田中先生）

さらに植物は怪我をするとかざぶたをつくると身を守る。バナナやりんごを切ると表面が褐色に変わるもの一つで、これはもともと紫外線の害を消すために植物の中にあるポリフェノールが酸素と反応して固まつたもの。

タラヨウ（別名・ハガキノキ）の葉に針などの尖ったもので文字を書くと、しばらくしてからくつきりと黒く浮き上がつてくるのも同じ原理だ。

植物にとつて多様な子孫を残すことが病気に対する最大の生き残り戦略であり、そのためいろいろな知恵をしぼってきた。（次号へづづく）

## グランドマスター

### 「グランドマスター」という映画

を観た。近代の中国武術繼承者たちがどのように生きたかが描かれていく。ぐつぐつと煮える蛇のスープを前にして、火に新たな薪を入れるかどうかを語りながら、武術界の舵取りを話し合うところが面白かった。

火が強いと焦がしてしまって、弱いと本来の味がない。武術の神髄を伝承するために、新しい息吹を加えることが良い選択なのかどうか、武術界のトップは苦悩する。

中国武術の門派は四百以上あるそうだが、その中の一つ詠春拳の継承者の一人、葉問（イップマン）が映画では中心的存在になつていて。詠春拳は中国南部に伝わる武術で、技の型は「小念头」「尋橋」「標指」のわずかに三つ。この基本を修練することで自然に体が反応して相手の攻撃を防御する。

いけばなは武術のような戦いではないので比べるのはおかしいが、稽古を重ねて技と心を体得することや、その神髄を身につけて次へ伝えることに悩むのは同じだと感じた。いけばなにとって「この三つのことを身につけよ」というようなものは何だろう。いろんなことが思い浮かぶが、つきつめていえば次の三つを探求することになると思う。

「心」と  
「技」と  
「美の感覺」。

NIHONJIN NO WASUREMONO

# 日本人の忘れもの



第2部 忘=筆森清範 清水寺貢主

44

→ けばなである。

花の茎を水の中で

切ると、ぐぐっと水を吸い上げる。葉に

しかし、その半面もつと気楽に、身近に花をいけてほしいとも強く願う。心のこもったいけばなは、人の心を和ませる。花

がいてあると自分もまわりの人もほつとする。部屋の空気ががらりと

変わる。そんないけばなの力を知つてほしいし、もつと暮らしに活用してほしい。

## いけばなの心



桑原仙溪

桑原専慶流家元

結婚を決めた相手は、江戸時代から続く花道家元の娘であった。それが私がいけばなを習うきっかけとなり、心の中の美形にする父と、おおらかに花と向き合う母と、もてなしの気持ちを伝える妻とともに、花の道を歩んできた。

私が花をいけるとき「自然の息吹を敬う」気持ちを大事にしている。



花に新たな命を吹き込み「生かす」ことを考え、構想する家元。ドイツ・テテロー市775年記念祭典にて花をいける家元と桑原櫻子副家元。(2010年5月／聖ペテロ・パウロ教会)

→ けばなである。  
花の茎を水の中で  
取り去ると輝いて  
持ちがいい。若松の  
幹を手で磨き古い葉  
を取り去ると輝いて  
くる。「生かす」た  
めに花や木に触れる  
うちに自然と心を通  
わせているのに気付  
く。いけばなを習つ  
て良かつたと思う瞬  
間である。花を習つ  
ていなかつたら、松  
の枯葉を掃除したあ  
との清々しさを味わ  
うこととななかつただ  
ろう。

私たちは自然に生かされ、  
豊かな心を養ってきた

いけばなに限らず、多くの芸術・文  
化は自然との関わりの中で生まれ育ま  
せてくれる」には、それなりの経験の  
せてくれる」には、それなりの経験の

## 成すべきことを 真剣に考え、 変えるべきことを



古典様式の「立花」には九つの役枝がある。松一色立花／桑原仙溪 写真＝宇佐美宏

# 変える時がきている。

積み重ねが必要となる。ところが一年に一度しかいけられないような花材もあるうえに、何十何百という種類の植物を相手にするので生涯修業は続く。また花材のとり合わせ、花器の選択によって良くも悪くなるので、自分自身の美的感覚を磨くことも大切。

古典様式の「立花」には九つの役枝がある。花道は奥が深い。

もつと気楽に身边に花をいけてほしい→

あつて立てるのに一日かかたりする。  
花道は奥が深い。

生き生きとした花や味わい深い枝は、大地・風雨・太陽が育み、そこに人の手が加わって私たちの手元に届く。虫や鳥も関わっている。そんな花に、新たな命を吹き込んで「生かす」のがい→

2年前の大震災で、自分の成すべきことを、あらためて考えた人は多かつた。福島の原発事故によつて原子力の恐ろしさに気付いた人も多かつたはずである。安易に電気を得る代償に美しい豊かな自然との関わりが断ち切られてしまったのだ。放射能による内部被曝はこれからどんな影響を及ぼすか知れない。放射性廃棄物の処理もままたらない。このことに私たちはもつと絶望すべきだ。そして、成すべきことを真剣に考え、変えるべきことは変える時がきている。子どもたちの未来のために。人も含めた美しい自然を損なわないために。

れてきた。私たちは自然に生かされ、豊かな心を養つてきたのだ。自然の恵みを受けて生かされていることに感謝し、先人が培つてきた自然との関わり方を「学び磨いて生かし伝える」ことが大事だと思う。

2年前の大震災で、自分の成すべきことを、あらためて考えた人は多かつた。福島の原発事故によつて原子力の恐ろしさに気付いた人も多かつたはずである。安易に電気を得る代償に美しい豊かな自然との関わりが断ち切られてしまったのだ。放射能による内部被

曝はこれからどんな影響を及ぼすか知れない。放射性廃棄物の処理もままたらない。このことに私たちはもつと絶望すべきだ。そして、成すべきことを真剣に考え、変えるべきことは変える時がきている。子どもたちの未来のために。人も含めた美しい自然を損なわないために。

●くわはら・せんせい  
1961年 大阪市生まれ。80年、桑原專慶流に入門。  
84年、同志社大工学部卒業。同年、同流14世家元長女  
櫻子と結婚、家元を補佐しながら教授活動を開始。  
2004年、15世家元襲名。日本いけばな芸術協会理事、京都いけばな協会副会長。

京都新聞 4月28日(日)に掲載された  
『日本人の忘れもの』第2部44の  
紙面より転載。(カラーページ)

## ビックダイシュー日本版

### 「生き残りのしくみ」③

前号で「多様な子孫を残すことが植物にとっての生き残り戦略」と紹介したが、その逆を行くのが性質を画一化した栽培作物だという指摘もなされていた。作物の疫病が大飢饉をもたらした事例も多い。大規模農業への警鐘ととらえることもできる。植物が本来持っている生き残るために力を生かした多様な農業の価値を見直すべきではないだろうか。

再び「ビックダイシュー日本版」<sup>212号</sup>より生物学者田中修氏による特集内容の紹介を続ける。

### 毒による独自の護身術

「季節感を出そう」とアジサイの葉っぱを食べ物に添えた飲食店で中毒事件が起きたり、フランスではキヨウチクトウの枝でバーベキューをして死者が出たり、またスイセンの葉っぱは二ラと似ているため誤つて食べて中毒をおこす事例もあります」

アジサイの葉には青酸を含む物質が、キヨウチクトウにはオレアンドリン、スイセンにはリコリンという有毒物質が含まれる。虫や動物たちに食べつくされないようにとそれぞれ独自の構造の毒（有毒物質）を持つようになつた植物。まさに彼らは“化学者”だ。そんな植物の毒を逆に利用する動

物もいる。オーストラリアのコアラは、ユーカリの葉に含まれている青酸を無毒化する細菌を腸に棲まわせているので、ユーカリの葉をほぼ完全的に食べて生きていける。ただし生まれたばかりのコアラにはこの細菌はないので、親の糞を食べて腸に細菌をとりこむ。

ヒトも植物の毒とは古より深く関わってきた。

江戸後期の外科医・華岡青洲は植物由来の有毒物質で全身麻酔をし、乳がんの手術を成功させたことで知られている。

ヒガンバナはよく墓地や田畠の畦道に植えられるが、これはヒガンバナに含まれる有毒物質リコリンによつて、モグラやネズミを寄せつけなくするという先人の知恵。またヒガンバナの球根は水にさらして毒を抜けば食べられるので、作物の不作の年に飢えをしのぐ救荒植物としての役目もあつた。

私は毒のある植物とともに生きる知恵を身につけた先人たちのおかげを多く受けている。

また野菜として出回っているものにも少なからず有毒物質は含まれている。例えばジャガイモの芽に含まれるソラニン、ギンナンのギンゴトキシン、モロヘイヤの種に含まれるストロフェチジンなど。果物の女王マンゴーは種の周りの果肉にあるマンゴールが皮膚をかぶれさせるので品良く食べよう。（次号へつづく）

## 直心道場

今は掛けていないが、長い間、家の玄関の間に、「直心道場」の書が額装で掛けられていた。昔の「テキスト」を見返していて、家元宅での師範認証式の写真に写っていたので思い出したわけだが、書の意味について調べてみた。

もともとは「直心是道場」からとられていると思われるが、これは維摩経というお経の中に出てくる言葉である。

昔、光嚴童子が毘耶離の城門を出て閑寂の境に修行の道場を求めようとしていたとき、維摩居士が城に入つて来るのに出会つた。光嚴童子が「どこからお帰りになられたのですか」と尋ねると、居士は「今、道場から帰るところです」とのこと、そこで「実は私は閑寂な道場を探しているのですが、居士が行かれた道場はどこにあるのですか、ぜひ教えてください」という間に「道場は外に求むるに及ばぬ。直心是道場、虚偽なきが故に」と喝破されたという。

「素直な心に偽りはない、そこにこそ道場はある」と言い換えることができると思うが、師匠も弟子も、この「素直な心」についてよくよく考えて稽古するならば、おのずといけばなる心に近づけるのではないかと思う。さて「花をいける素直な心」とは。自問自答中。

## ビッグダイシュー日本版

### 「生き残りのしくみ」④

父も以前、テキストで書いていたが、花の色にはそれなりの理由があるのだ。先月につづいて「ビッグダイシュー日本版212号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

### 太陽の光とたたかう

植物は太陽が大好き！と思いつつだが、実際にはまぶしすぎる太陽の光に対しての防御手段もとっているのだ。

「昼間の太陽はだいたい10万ルクスの明るさがあるんですが、光合成する材料となる空気中の二酸化炭素が0・0・4パーセントしか使っていません。残り7万ルクスのエネルギーは行き場がなくなってしまい、酸素と反応して活性酸素が生まれてしまう。」

「植物に紫外線が当たつたら、猛毒の活性酸素が生まれます。たとえばオキシドールという消毒液がありますが、あれは過酸化水素水で活性酸素のごく薄い液ですが、それで菌が死ぬ。パラコートという除草剤も、活性酸素で植物を枯らします。」この猛毒の活性酸素に対抗するため、植物は自分で「抗酸化物質」をつくっている。その代表がビタミンEとビタミンCで、これらが活性

酸素を消してくれる。

また、植物が咲かせる「花」の色も抗酸化物質と関係があるのだ。もちろん受粉のために昆虫や鳥を呼び寄せる目的もあるが、同時に紫外線対策のためでもある。

「植物たちは太陽の紫外線が降りそぞろ中で成長し、花は子孫をつくります。花の中で生まれてくる子どもたち、つまりタネを守るために、アントシアニンとカロテンという二大色素を使って活性酸素に対抗しつつ花びらを美しく装つているんです。これらの二大色素は典型的な抗酸化物質だ。」

バラ、アサガオ、シクラメン、サツキツツジなどの花はアントシアニンという色素で装つている。これは赤と青の花を咲かせる。

キク、タンポポ、マリーゴールドなどの花はカロテンという色素で装つている。これは赤や橙、黄色の花を咲かせる。

紫外線が強く、強い光のところで花の色や果物の色がどんどん濃くなるのも植物の防衛本能のあらわれなのだ。

私たち人間も紫外線に当たつたりすることで活性酸素が発生するが、果物や野菜からビタミンCやEをとることで対抗できる。またブルーベリーのアントシアニンは目にいいなど、さまざまな植物の能力の恩恵を受けている。植物の働きぶりに感謝しなければならない。（次号へ）

## 二種でいける 仙溪

今月の「テキスト」に掲載した8作（蓮の立花をのぞく）はすべて二種の花材でいている。

普段の稽古では二種類の花材の組み合わせでいくことが多い。主材となる枝に花をとり合わせて、さらに小花をもう一種という感じだ。三種類目の花材で色彩を深めたり補たりする。あるいは季節感を強めたりできる。

「三種のいけばなが身についてきたら、二種でいけてみるといい。」

一種の花材だけでいけようとすると、花器の選択が三種よりも難しいと感じるだろう。また一方も高度な技量が必要になる。二種でも見応えのあるいけばなにするには相当工夫しないといけない。とてもいい勉強になる。

## ビッグダイシュー日本版

### 「生き残りのしくみ」(5)

日本版 212 号より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

#### 逆境を生きのびる術

暑さに強い植物は体を冷やす工夫をし、乾燥地の植物は水分の蒸発を少なくする工夫をし、寒さに強い植物は凍りにくくする工夫をしてい

る。

「夏に育つ植物たちは、私たちが汗をかくのとまったく同じ仕組みで、葉っぱの気孔という穴から水を蒸発させて体を冷やしています。」

「ですが、サボテンなどの多肉植物は乾燥した砂漠地帯出身なので、水の蒸発を防ぎたい。だから、夜の間に気孔から二酸化炭素を取り込み、葉に蓄えて日中の光合成に備えます。そうやって水の消費を節約して生きているんです。」

「寒さ対策は、まず凍らない性質を身につけないといけないです。ですから、常緑樹なんかは冬に備えて少しづつ少しづつ糖分などをからだに備えていくんですよ。」

「寒い冬を通り越した大根、白菜キャベツは甘いと言われますよね。ハウス物のホウレンソウも出荷前に

一定期間寒風にさらして甘みを増すそうです。栗なんかも冷蔵庫にいれおくと甘くなるんですよ。」

「猛暑が苦手な植物は春に花を咲かせて枯れ、夏はタネという形でやり過ごす。極寒に弱いものは秋に既にタネになっているのです。」

植物は日々の糧を手に入れるために独特的進化を遂げたものもある。

ハエトリソウは北アメリカ出身で、窒素などの養分をあまり含まないやせた土地だったために、虫のからだから窒素を含んだ物質を摂取する能力を身につけた。

「そこまでしてどうしてやせた土地でいきしていくのか?と思われるかもしれませんね。でもやせた土地だと、他の植物は棲めないため、競争がない。だから、こういう能力をみにつけてでもハエトリソウは、この地で生きていふことを決めたんでしょう。」

ネナシカズラは根がなく、他の植物の茎に巻きついて吸い付くように突起が伸び、その植物から栄養を奪う寄生植物。

「でもネナシカズラは決して宿主が枯れるほどには栄養を奪わない。自分の生き方を知り、わきまえを得ている。」

ピーナッツは南米、ブラジルあたりが原産で、河原近くの砂地を好みます。かさかさの殻はなんのため?。

「大雨の後で増水すれば、他の植物は流されまいとするんでしょうが、ピーナッツは『チャンス!』とばかりに流されていくんです。あのサヤはカサカサなので、水に浮かぶでしょう。そして、流れ着いた新天地ですくすくと生育していくんですね。そうして生育地を広げて生き抜いてきました。」(次号へつづく)

## 流祖の時代より

### 近松門左衛門

#### 「聖徳太子繪傳記」

近松門左衛門は、江戸時代に上方（京都・大坂）で活躍した人形淨瑠璃の作者である。承応二年（一六五三年）から享保九年（二七二四年）までの七十二年の生涯で、百作以上の淨瑠璃を執筆し、歌舞伎にも作品を残している。

淨瑠璃の一つに「聖徳太子繪傳記」というのがあり、その中に立花が出てくる。話のあらすじは次のようなものだ。

用明天皇の皇子として生まれた聖徳太子は仏法に帰依し、排斥派の物部守屋の母が仏法をののしつた時も不思議を見せ、改心させる。母は自害して守屋を仏法に入るよう勧めるが、守屋は拒絶して反逆し、太子方と争う。帝や北の方を奪い幽閉などした守屋を、太子は河内国稻村城に攻めて、これを滅ぼす。（以上、廣田隼太氏のHP「近松門左衛門でござーい」より転載）

さて、立花のくだりは、物部守屋の母が、息子の守屋に自分の仏法への改心を受け入れさせる方法とし、聖徳太子から「毎月六齋日、草木の花を瓶に活け、諸天に祭り供養せよ、凡そ立花の功德には、草木成

仏の因縁花散り葉落るにも聲聞無常の悟あり、粧ひ立て色々に咲き匂ふ花を見る時は、濁る心も清やかに怒りなく恨みなく天人の歡樂花にあり、いかに放逸の守屋も花には心やはらべし、その時出家の姿を見せ、仏道に誘引せよ」と教えられ、はたして守屋は立花の会のようなものを催すこととなるのが……。

そこで立花の描写を抜き出して、ここに書き写してみる。

あしの心、柳の副、龍置に寒菊  
正眞の鶏頭に少し色を持たせてし  
やれ、木の取合せ、  
南天の心、正眞のしをん、りん  
どうのあしらひ、胴にいぶきのう  
つりのよさ、  
松の心、正眞の燕子花、枇杷の  
葉をつかふたり、控の柏梅戻の受、  
見越の檜葉、  
青葉まじりの紅葉の心、なかし  
控の取合、正眞の菊、どれもどれ  
もよう出来たとほめ囃す、  
そして「眞の立花」と題して次の

是夕御覽せ、是ぞ此神に手向の  
眞の花の数、ゆがまず直なる心の  
竹を立初る一二の枝の房やかに、  
茂る葉がさね異竹の世々を重ねる  
例也。正眞は水仙に、陰と陽と  
のつがひ葉は、ここに口傳と岩戸  
を表し、めぐみの露を貝口にうけ

て、諸願も成就の神、影向の枝と  
かや受そへは、殘んの菊籬のもと  
に手折りて、ゆうゆうとして南山  
を、見しは唐土日の本の、朝日の  
てり葉、はまきして、君がため鐵

て、諸願も成就の神、影向の枝と  
かや受そへは、殘んの菊籬のもと  
に手折りて、ゆうゆうとして南山  
を、見しは唐土日の本の、朝日の  
てり葉、はまきして、君がため鐵

かや受そへは、殘んの菊籬のもと  
に手折りて、ゆうゆうとして南山  
を、見しは唐土日の本の、朝日の  
てり葉、はまきして、君がため鐵

けり、

なんと素晴らしい描写だろう。少

し意味のわかりかねるところもある

が、立花に対して造詣が深くないと

描けない文章である。聖徳太子の時

代はまだ立花は生まれていないはず

なので、近松の創作として歴史の中

に立花を道具として組み込んだもの

と思われるが、それにして多くの詳

しきはどうだろう。

流祖（畠春軒仙溪の「立花時勢粧」

が世に出た貞享五年（一六八八年）

には、近松三十五歳。同じ京都の地

で仙溪も近松も過ごしていたことに

なる。

その頃、立花の会が競うように催

されて、その評判を反映して近松は

立花を話に組み込んだのだと思う。

「立花時勢粧」もおそらく参考にし

たのではないだろうか。

人形淨瑠璃の演目には立花について

見事な言い回しがあれば、観客も

立花にさらに興味を持つに違いない。

立花の功德を聖徳太子に語らせ

ているところにも注目したい。

見事な言い回しがあれば、観客も立花にさらに興味を持つに違いない。立花の功德を聖徳太子に語らせているところにも注目したい。

立花を話に組み込んだのだと思う。

「立花時勢粧」もおそらく参考にし

たのではないだろうか。

人形淨瑠璃の演目には立花について

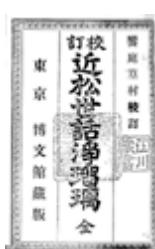
見事な言い回しがあれば、観客も

立花にさらに興味を持つに違いない。

立花の功德を聖徳太子に語らせ

ているところにも注目したい。

参考



## ビッグイシュー日本版 「生き残りのしくみ」⑥

1951年、千葉県にある落合遺跡（縄文時代の船たまりと推測される）からハスの花托が出土し、植物学者の大賀一郎博士によつてハスのタネの発掘調査が行われ、地下6mの泥炭層からハスのタネ3個が見つかった。

二千年前の弥生時代のハスのタネは、その年発芽して、翌年には美しい桃色の花を咲かせた。植物の生命力の強さに脱帽である。最終回。

先月について「ビッグイシュー日本版212号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

### 命を次代につなぐ多様な工夫

二千年の眠りから目覚めた「大賀ハス」のほかにも、ツタンカーメンの墓から発掘されたと言われる「エンドウマメ」。弥生時代の遺跡で見つかったとされる「古代コブシ」。室町時代の遺跡から見つかった「ツバキ」や「シラカシ」などが息を吹き返している。植物の人生計画は無限のようにも思える。

「タネは発芽にものすごく用心深いんです。発芽には、温度・水・酸素の3条件が揃わないとダメだけれど、それに加えて70パーセント以上

のタネの発芽には光も必要。太陽の中でも光合成がしやすい赤色の光が当たるのを、ちゃんと感じてから発芽します。タネは慎重に、すごい能力を背負いながら命をつないできたんです。」

タネ以外にも植物は工夫をしています。「交配するために虫に来てもらうには、蜜や香りをつくるコストがかかります。いざというときにも子孫を残せるよう、保険をかけるように進化したのが『自家受精』できる植物です。例えばスマレには花が開かない蕾があつて、中ではいつのまにかタネがいっぱいできている。私たちが食べているお米や麦、大豆もそうした自家受精の性質を利用して品種改良したから、糊ヌカや莢カヤができると空っぽということがないんです。」

ほかにも熱帯地方のマザー・リーフは、葉っぱの縁にあるギザギザから根や芽を生やし、『ハカラメ』とも呼ばれています。

植物にとって一番安心な生き方とも言えるのが、地下茎をもつこと。ヒルガオ、ワラビ、タケノコなどだ。「土の中に潜つていたら温度もそんなに変動しないし、地上で芽を出しうまいこと育つことができればそれでいい。」

「最近ツクシが少なくなってきた。ビルや道路の建設で土を掘り起こしまるからです。土ごと掘り起されてしまったら、地下茎を生やしても生きていけません。」

植物は約4億年前から陸上にて、人間が現れたのはたかだか何十万年前。それなのに地球を自分たちの土地みたいにしていないか。私たちはここで箸を置き、目の前のニンジンやキャベツにも感謝の気持ちをつたえるべきかもしれない。

「植物は、水と二酸化炭素と太陽の光で、自分たちの食べ物をちゃんとつくつて、本当にきれいな生き方をしてる。動物は食べ物や配偶者を探してうろうろ動き回るけれど、もし植物が動いて、本気で逃げ回ったら…。私たち動物はいきていけないだろうねえ。」

おわり

## 冷たい風

仙溪

中庭の山茶花がいつのまにか枝いつぱいに咲いて目を楽しませてくれる。

寒い季節がやつてきた。父が亡くなつて一年。振り返ると多くのことが頭をよぎる。けれども、去年は一度訪れた東北も、今年は一度も行かなかつた。東北の冬は長く厳しい。

毎日お風呂に入れて、温かな食事ができることを幸せに思う。できれば来年はまた仲間と行つてきたい。花は人の気持ちに優しく寄り添ってくれる。

畑を耕し、収穫して暮らしの糧を得る。漁をしたり、ものを作つたり売つたりして私たちは生きてきた。そんな素朴な営みができなくなつてしまつた人が増えている。

原発事故はあるはずのないことだつた。日本には54もの原発があり、ほとんどが都会から遠く離れたところにつくられ、都市も地方もその現状に甘んじている。人の欲が生んだ金融危機の影響も大きい。世界各地の紛争も絶えない。

個人ではどうしようもない大きな流れに、知らぬ間に押し流されようとしている気がする。しつかり足を地に着けて、自分で考えることをしないと、おかしなところへ連れて行かれていることすら気つけない。

温かな部屋にいても、冷たい風の、あのつらさ痛さを想像して、自分にできることをしていきたい。

西洋館に秋を彩る

桑原專慶流関東支部いけばな展

11月23日(土)～24日(日)

横浜山手・外交官の家  
家元ブログではカラーで御覧いただけます。



## ウエルカムいけばな

### （）心地よい空間（）

あなたは何のために花をいけるのか。  
と問われたら何と答えますか。

「自分の美の世界をいけばなで表現したい」

「いけた花が新たな命をふきこまれて輝いてくれるのが好き」

「とにかく花をいけると心がおちつき、豊かな気持ちになれる」  
ただ花をいけるということにも、人それぞれに色んな思いがある。  
また、「今日はお客様がこられる

から、花屋さんで花を買っていける「おこうかしら」というような素朴な気持ちで花をいけることもあるだろう。訪れたお宅に花がいけてあると、やはり嬉しい。大切にいかけられた花からご主人のもてなしの気持ちが伝わってくるし、なによりもその部屋にいるのが心地よい。

以前、フランス北部のノルマンディーに大きな風景式庭園を持つ貴族のお宅にお邪魔したことがある。その時通された居間に、庭から切ってきたコブシの大きな枝がそのままの姿で壺にいけられてあつた。アルデコ調の大きな明かり窓からさす

光と、無数のコブシの白い花が強く印象に残っている。

花がいけてあることで、その場がとても居心地のいい空間になる。別の方をすれば、花がいけられて花をすれば、花がいけられて花をすれば、花がいけられて花をすれば、花がいけられて花をすれば、花がいけてあるので、その場がとても居心地のいい空間になる。別

がいつもボランティアで花を飾つて花をすれば、花がいけられて花をすれば、花がいけられて花をすれば、花がいけてあるので、その場に心地よく迎えられたような気持ちにさせてくれる。それこそいけばなの大きな魅力の一つだと思うのだ。

関東支部の皆さんと横浜山手にある西洋館を花で飾る催しは、今回で4回目になる。横浜の佐藤慶真先生がつとめ、2日間の花会をさせていただいた。従来のいけばな展

こられた縁で、2日間の花会をさせていただいた。従来のいけばな展ではなく、あくまでも来館者を迎える花として。

今回お世話になつたのは「外交官の家」と呼ばれる洋館。ニューヨーグク総領事やトルコ特命全権大使などをつとめた明治政府の外交官内田定植氏の邸宅で、もとは東京渋谷の南平台に明治43年に建てられた。設計者はアメリカ人で立教学

校の教師として来日、その後建築家として活躍したJ.M.ガーディナー。京都の長楽館（旧村井別邸）

平成9年に横浜市は、内田定植氏の孫からこの館の寄贈を受け、山手イタリア山庭園に移築復元し一般公開した。同年、国の重要文化財に指定されている。

驚かされるのは丁寧な復元だけでなく、室内の家具や調度類も再現されていることだ。聞くところによるとカーテン一つとっても、使われていたのと同じものを特別に京都の龍村織物でつくってもら



うほどの念の入れようだったそうだ。まさに当時の外交官の暮らしを体験できるように、との熱い思いがこもっている。

特別な思いのこもった館内だからこそ、家具には「手を触れないでください」という札が置かれている。

「大事な建物だから、気をつけなさい」という緊張感よりも、「外交官の家に招かれた客人」という氣分になる。貴重な建物を鑑賞する、というような距離感ではなく、のだから当然だ。美意識の高い空間をのちのちまで残すために、天気の良い日には太陽側の窓に、さ

りげなく白いロールスクリーンを

下ろして廻り、強い日射しをやわらげるということもされている。

そんな館内に花が飾つてあると「大事な建物だから、気をつけないと」という温かな気持ちを感じる空間

に変わる。



館内の花の場所を事前に出品者に割り振つて、それぞれの空間を意識しながら器や敷物を考え、花をいけ

てもらつた。独りよがりでなく、来館者を意識しながらいけられた花は、どの花も部屋に調和していた。数種類の敷物を持ってこられて、雰囲気に合うものを現場で選んだり、

360度どの方向からも見られるようになつたり。そのようにして、「ようこそいらっしゃいました!」「おはい」という気持ちがこめられたいければ

なはいけられてついた。

最初に書いたが、花をいける思いはいろいろあつていいと思う。でも、

皆で心地よい空間をつくるう、暮らしの中に、社会の中に、ウェルカムいけばなを!

今の世の中に「ウェルカムないければな」が必要とされないと強く感じられる。花と花の空間を意識して、花自身が気持ちよく感じられるように、

いけられたいければなは見る人も心地よくしてくれる。そんな花のまわりでは、人と人も心地よい関係になれる気がする。

地よくしてくれ。そんな花のまわりでは、人と人も心地よい関係になれる気がする。

暮らしの中に、社会の中に、ウェルカムいけばなを!



## 温故知新

仙溪

「温故知新」は孔子が論語の中で、師となる条件として先人の思想や学問を研究するよう延べた言葉で、「ふるきをたずねてあたらしきをしる」とも読まれている。

ここで「温」という字が使われているのは何故だろう。うわべだけではなく、時間をかけて温めるように研究しないということだろうか。私たちのまわりの古くからあるもの。古くから伝わること。それらに命を吹き込めということだろうか。

私たちの花道では練習ではなく、「稽古」と言う。「稽」は「考える」という意味で、「いにしえをかんがえる」ということになる。昔のことを調べ、今なすべきことは何かを正しく知るというのが元の意味で、学問での言葉だったのが、芸能や武術を学んだり習うことにも使われるようになった。

先人の思想や学問を研究したり、昔のことを調べなさいと言われても、何から手をつければいいのか。でも、自分自身が道に迷つたり、物事に行き詰まつた時に、昔の人はどうしてなんだろうかと、その時初めて自分で「探す」というのでいいと思う。大事なのはもがいて掴もうとする求道の精神だ。

今まで導いてくれた両親を亡くして、大切なものを「探す」毎日。「稽古」と「温故知新」を肝に銘じて、いけばなの道を進んで行こうと思う。

# 能の中の立花 仙溪

下京区五条通辺り（京都市）

能の「半部」の前場は僧侶が立花供養をしているところから始まる。

「立花供養」とはどんなものか。

「花の供養。花を立てて、花に回向する。」（中央公論社『解説・譜曲全集』より）

「切り取られた花々のために花を生け、供養を行う仏事。」（小学館『日本古典文学全集』譜曲集より）

この「花を供養する」が「半部」の要になつてゐると思う。

## 「半部」はじめ

作者 内藤左衛門

素材 『源氏物語』夕顔の巻

場所 前…都・紫野雲林院（京都）  
市北区紫野雲林院町



能「半部」の舞台に立てられた松真の立花。父・仙齋作。一九八一年四月。

舞う。やがて夜明けの鐘の音と共にまた半部の中に消え去つた。

■語句解説

半部…昔の建築様式で寛殿などの板壁の一部。上半分を窓のように

押し上げられる蔀戸。

蔀戸…格子の裏に板を張った雨戸。

立花供養（觀世・宝生・金剛・喜多）※舞台に実際に立花が供えられる。替之型（金剛）

（ここまで 大樹能樂堂ホームページより転載）



「源氏・拾花春秋」『夕顔』より「夕顔の生花」。仙齋画。

光源氏が下町でめぐりあつた美女の家の垣根に仄々と咲いていた夕顔の花。源氏がこの女性を夕顔と呼んで愛したのもつかの間、はかなく世界を去つてしまふ。「半部」ではこの夕顔の靈が現れて供養を願い出る。夕顔の靈は、花を大事にする僧侶に心を開いて蔀戸を開ける。源氏の君に摘まれて命を縮めたのは幸せな一夜の想い出。後悔はなかつたようだ。

「半部」で思い出すのは父（仙齋）が舞台の立花を担当した時のこと。

私は大学の3回生だった。「テキスト215号（1981年5月）」で紹介されているので次に引用する。

4月12日に大阪のフェスティバルホールで上演される能楽「半部」のための立花を頼まれていたので10日から幹作りにかかりた。

11日には大阪に運び、フェスティバルホールの大舞台で組み上げたが、2mの高さと横幅、奥行きがあるので相当な重量になる。

しかも上演の際、橋がかりを舞台まで演者によつて運ばれるのである。

だから絶対やれても崩れないようにきっちりした立て方をしなければならない。

又観客の方から見ての遠目を考えて、それぞれの枝の減り張りもはつきりつけなくてはならない。

おまけに四方正面の立花ではなくてはならないと「なくてはならない」が、うんと付く花である。

だが吉田忠史君と中川和則君の協力で、楽しく仕事が出来て、美しい品の良い立花が立てられた。

12日の当日は前記の二人に櫻子がついて行つてくれ、いざという時にそなえて、中川君が能装束をつけて舞台の袖で待機していくくれたそうである。（引用終わり）

る。

「幹作り」は主に松の立花を立てる場合に、その骨組みを作る作業のこと

で、幹をとめる切り口の切り方

や立て幹への留め方に熟練の技が必要となる。今は電動ドリルというものがあるので、木ねじで簡単にできる作業も、昔は錐で穴を開けて釘を打つて留めていた。そつすると必ず一度は指を金槌でたたいてしまう。みんな痛い思いをしながら腕をあげてゆくのである。

さて、家元宅で手にあざをつけながら立花の下準備を手伝い、翌日大阪へ運んで舞台脇で仕上げたわけだ。四方どこからみてもバランスが、写真のように大層立派な立花だった。四方どこからみてもバランスよく、立花とは美しいものだなど思つたことを覚えている。

本番の日、父は母とはなど3人で岡山県の直門会いけばな展へ行かねばならず、吉田さん、櫻子、私の3人が立花の守り役になった。演者の衣装が当たつて倒れた時には私が飛び出でていき、対処することになつていた。羽織袴を着せられて、じつと舞台を見つめ続けたので、心身共にくたくたになつた。幸い立花は倒れることなく、重厚な松に正直の杜若が映えて大変好評で、ただ舞台袖で見守つていただけだったが、大役をやり終えた安堵感で、帰り道の気分爽快であったことも思い出される。

文中の中川君というのが私であ

く最初の想い出である。

私が父の立花を手伝つた、おそら



## 被災地へ

仙溪

5月の末に、2年ぶりに被災地を訪れた。NPOの仲間3人で訪れたのは前回と同じ宮城県気仙沼市の2カ所の仮設住宅。今回も現地のボランティア団体において下さった人も多かった。世話になり、当時は会場がいっぱいになる賑わいになった。前回の訪問を覚えていて下さった人も多かった。

「お花は人気がありますね」。孤独にならないようなど、イベント参加を呼びかけてもいつもそんなに多く集まってくれないとのこと。

「あと2年は仮設暮らしなの」。集団移転の候補地は決まったものの、建設待ち状態だそうだ。「オリンピックが決まりたおかげで、いつになることやら」「巨大的な防潮堤ができちゃうと海との関わりが絶たれてしまう」お花の後の雑談に花が咲く。「帰つたら皆に伝えます！」過去に何度も津波災害を経験した三陸沿岸。気仙沼にあるリアス・アーケ美術館では、「東日本大震災の記録と津波の災害史」という常設展示で、悲惨な現実を記録、検証し、現場から未来に向けてのメッセージを発信している。同名の図録(800円)は郵送で購入可能。

「人間だけを自然から切り離してはいけない。人類は自然を畏れ敬い、自然のリズムに身をゆだねて生きてきたはずだ。その長い時間の蓄積を再認する必要がある。」図録より。ここに編まれた一言一言が胸を打つ。多くの人と共感できればと思う。私たちの未来のために。

## 嫩?

仙溪

「立華時勢粧」の紹介も3回目となつたが、読んでいただいているだろうか。現代語訳になると原文の雰囲気が伝わらないので、あえて元の言い回しのままにしている。少々読みづらいかもしれないがご容赦を。絵図の横に示した花材名については、『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』(日本華道社刊)を参考にさせていただいている。

その中に「嫩」という花材名が何度も出てくる。はじめて見る字で調べてみると、

【嫩】 [音] ドン ノン

〔訓〕 わか・い

《意味》若い。若くて柔らかい。とあった。嫩葉は若葉のこと。柔らかな枝を加えることで、立花を生き生きとさせているのだろう。

自分で何も生み出さず、消費するところだけに熱心な人たちがいる一方で、純粧に、誠実に、自然の恵みに感謝して今を生きる人たちがいる。地に足をつけて先人の教えのもとに、信じる道を進む人たち。そんな人の言葉に目を見ませられる。教わる、育てる、楽しむ。豊かな心を得るヒントは、自然と共に生きてきた先人の知恵の中にこそあると思う。

私たち一人一人が生き方を見つめなおす時なのかもしれない。日々の暮らしの中で自然の命をどれだけ感じているだろうか。「ほんとうに大切なことは?」

## 大切なことは?

仙溪

宮城県の海岸には大きな黒い袋が整然と積まれていた。袋の中は震災が起き、いや津波でグチヤグチャにされた大切なものたち。土地の人はどんな思いで見ているのだろう。愛しい過去の思い出。忌まわしい理不尽な体験。

黒い袋の中には悲しみが詰まっている。自然災害がもたらしたもの。その上に私たちが生んでしまった核汚染が追い打ちをかける。過ちと真剣に向き合わないといけない。つくってしまった過ちは、使い続けた過ち。無関心の過ち。騙し騙されてきた過ち。

「放出された放射性物質は大変危険です。原子力政策はまちがっていました」と、いつか軌道修正してくれるだろうなどと思うのは間違いだった。他人任せではなくはだめだ。日本の、地球の行く末は、一人一人がどんな生き方をするかにかかっている。

## 若杉ばあちゃん

「若杉ばあちゃん」の書いた本が静かなブームになつてゐる。数日前から、そのうちの三冊を買って読み始めている。私自身、年初に「温故知新」を唱えていたので、日本人の昔からの知恵が詰まつていそな気がして興味がわいたのだ。

「秋茄子は嫁に食わすな」ということわざの本当の意味をご存知だろうか。「家の子孫を産む嫁を思つて、食べさせたくない」からで、秋の茄子を食べると流産しやすくなることを昔の人は知つていた。

若杉友子さんはそのことを食材の陰陽で説明している。

茄子は陰性で拡散する力が強いため、食べると子宮が冷えてゆるむ。とくに秋茄子は陰性が強まること。

陰性は体の中心から外へにげていくエネルギーで、陽性は逆に体の中心に集まる求心のエネルギー。陰性の食べ物は体を冷やし、陽性の食べ物は元氣が出る。食べ物に含まれる、陰性のカリウムと、陽性のナトリウムの割合を知ること。昔の日本人の食生活は、もともと陰性である野菜を火や調味料で陽性にして食べ、季節の変化や体調にあわせて陰性と陽性の食べ物をバランス良く摂つてきた。野草の効用も大きい。肉を食べながらも強靭な体をつくれたのだ。そしてお米は陰陽を併せ持つ元氣の源。味噌はそんちの家の宝物。お伝えしたいことが多すぎるのに、皆さんも是非自分で読んでみてほしい。

良い師匠に出会えたことに感謝。これから私たちにとって、本当に大切なことを、若杉ばあちゃんはなんとかして伝えようとしている。

## 草木の風興 仙溪

古い花書に「風興」という言葉が出てくる。室町時代後期、立て花の名手であつた池坊専応の口伝を記述した「池坊専応口伝」は、次のような文章で始まる。

瓶に花をさす事、いにしえよりあるとはきき侍れど、それはうつくしき花をのみ賞して、草木の風興をもわきまへず、只さし生けたる計なり。

この一流は野山水辺をのづからなる姿を居上にあらはし、花葉をかざり、よろしき面かげをもととし、先祖さし初めしより一道世に広まりて、都鄙のもてあそびとなれる也。

自然に目を向け、

出生をよく理解

することと同時に、心に留めた草木の風興をいくようにしたい。

この文章のあとも、「絶景もそこへ行かねば見られないし、絵を見ても夏涼しくはならず、秋に香りがするわけでもない。庭に山を築き泉を引くのにも大変な手間がかかる。(それなのに)僅かな時間で床にいけられた、ただ少しの水と小さな枝が、奥山の勝景をあらわし、風の匂いまで感じることができるのはまさに妙術。草木を見て心をのべ、春秋のあわれを思うなら、その悟りの種を得ることもできるだろう。」と述べている。

「立華時勢粧」が世に出るのは「専応口伝」からおよそ百五十年後。そ

の序文でも「ちからをもいれずして

高き峰、深き渓を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみると、

その術、謹芸の及ぶところにあらず。」とある。また、「立花八戒」の中では「心花にあらざる事」を戒めている。

おそらく富春軒仙溪も、「草木の風

興をもわきまえず只さし生けたるばかり」ではないと考へていて、ちがいないが、百五十年の間にシン

ブルな立て花は、より複雑な立花になり、形式化してゆく中で、今一度

自然に目を向け、「出生の景気」を大切にすべきだと書いている。

風興という言葉は漢和辞典に「風趣興味」と説明されている。「味わい深いおもむき」とも言いかえられるだろうか。

自然に目を向け、出生をよく理解

すること

。

## 感受性

仙溪

いけばなと料理の共通点はいろいろあるが、自身の感受性を豊かにされるという点も大きい。櫻子によれば、料理を続いていると、したいに食材や調味料の特性がわかるようになり、それらを生かす工夫ができるようになってくるし、いけばなも一緒に、とのこと。  
なんでもうだが、気持ちを入れて何度も何度も続けていると、はじめはできなかつたこと、わからなかつたことが、できるようになり、わかるようになつてくる。自分といふ器が、だんだんと豊かになつてゆく感覺といつてもいい。

いけばなや料理は感受性を豊かにさせてくれる上に、まわりの人もしわせにすることができる。美味しい料理や心のこもったいけばなは、「和み」を生んでくれる。

そんな花や料理がつくれるようになると、自然に「大切なものは何か」も見えてくるんじやないかと思つてゐる。季節のうつろいを肌で感じながら、さきやかでも、その時季の花や食材を味わうことがとても豊かなことなんだということもわかつてくる。

ただお腹がふくれればいいとか、なんでもいいから生けておけというのではなくて、一手間を惜しまない暮らしを心がけたい。

## 蘊奥とは

仙溪

「蘊蓄を傾ける」という言い方がある。持つてゐる知識や技能を精一杯發揮するという意味だが、「蘊」には、積む・蓄えるという意味がある。この蘊に奥をつけた「蘊奥」という言葉はご存知だろうか。「学問・技芸などの最も奥深いところ」を表す熟語だ。芸の蘊奥を極める、などというように使われる。「うんおう」又は「うんのう」と読む。

先月のテキストに、何でも長く続けると、見えなかつたものが見えるようになる、というようなことを書いたが、花の奥義を極め、多くの弟子さん達に慕われるようになられた大師範の先生方は、まさに様々なことを体得され、その一つ一つがご自身の内に積み重なつて、素晴らしい知識や技能の蓄えをお持ちだ。

そんな大師範には、しかるべき役職にお就き預いて、私が道に迷つた時に教えを請いたいとの思いで、この度、家元になつてはじめて、数名の先生方に「華老」位に就いていただきことにした。そしてその委嘱状に、「蘊奥」の發揮を願う一文がある。技術や知識はもちろのこと、豊かなお人柄も見習わせていただきたい。

先日は岡山での総会・新年会で華老の授与式をさせていただいたが、それぞの先生のお人柄を感じ、素敵なお挨拶をしていただき、胸が熱くなつた。

## 華老の先生方（敬称略）

上野 淳泉	（岡山）
竹中 騰敏	（京都）
小野 静泉	（岡山）
武田 慶園	（徳島）
長谷川慶賀	（大阪）

この度、次の先生方に、華老にご就任いただきました。

山本 竹泉	（岡山）
竹内 騰陶	（京都）
岩沢 雅芳	（岡山）
横田 康重	（京都）
鈴木 秀映	（岡山）

和田 廉子	（大阪）
室山 粋声	（岡山）
尾崎 廉和	（徳島）

## 花の見方

仙溪

## 花の見方

仙溪

「立華時勢粧」には「立花見様の事」として、人が立てた立花を拝見するときの心得について書かれている。

例えば招かれた家の床の間に立花が立てられてあるとして、どのよう拝見すればよいかが詳しく書かれている。現代ではそのような機会は希になつたが、心得として覚えておこう。立花は手間をかけて立てるのだから、拝見にも礼儀をつくしたい。

また「世人花を見て、あしき所を語れども、よき所を語らず。その心花にあらざるがゆえなり」とも書かれている。初心者の花でも何かいい所を探すようにしなさい、見つけたいい所を覚えておきなさいと教えて

### 今月号で紹介した「立華時勢粧」

中には、いけばなを習う心得について「事と理」があると書かれている。辞書を見ると「事」はものごとの事物・事象のこと、「理」はその背後にある真理と説明されている。まず、いけ方を身につけることに専念し、上手になつたら「どんな花をいけるか」を考えよ、ということなのだと思う。

華老の先生方の花はいけ方はもちろん上手いえに、皆さん独特の雰囲気がじみ出ている。「事理不二の境に至りて花に自由を得べし」なのだ。父もまさに自由を得た花をいけていた。私もそこを目指したい。

## 被曝対策

仙溪

2月24日、東京電力の発表による  
と、福島第一原発から高濃度の放射  
性物質を含む水が海に漏れ続けてい  
ることが明らかになった。それも昨  
年4月に把握しながら公表せず、対  
策もしていない。流れ出��けている  
ものには、体内に取り込むことで体  
を蝕む大変危険な核種が含まれてい  
る。

そもそも私達は本来知らされるべ  
き危険について、隠されているので  
はと疑つてかかったほうがいいよう  
だ。自分達の身は自分達で守る、そ  
のために情報交換が大切になつてく  
る。

心配しすぎてもいけないのだが、  
命あつての物种である。放射能の(正  
しい)知識を身につけて、その対策  
を講じつつ、元気はつらつで！

## 大日如来さまに花を

仙溪

## 華道人口

仙溪

京都東山花灯路に紫木蓮の生花をいたた。  
場所は清水寺の参道にある眞福寺で、通りに  
面した大日堂では、大日如来座像を拝むこと  
が出来る。この如来様は岩手県陸前高田の松  
でできている。7万本以上あつた松原が津波  
で消失し、1本だけ残つたあの場所だ。沖へ  
流された内の700本が岸にもどつたそだ  
が、鎮魂と復興の願いが込められて、大日如  
來像となつた。

いけ込みは偶然にも東日本大震災から4年  
目の3月11日。被災地への思いを込めて、お  
祈りをさせて頂いた。



ここ数年、いけばな人口が減つてしま  
た、という話をよくするようになつ  
た。その原因の一番目には、いけばな  
に魅力を感じられなくなってきたこと  
が考えられる。

多くの人は日々の暮らしの中で、花  
がいけられているのをどれだけ目にし  
ているだろう。家に花を飾る場所が無  
いともよく耳にする。花をいけない家  
庭で暮らしている人は、いつたいどこ  
でいけばなに触れられるだろう。

今でも質の高い料理屋には氣の利い  
た花がいけられているし、オフィスビ  
ルのエントランスに花がいけられて  
いるところも無くは無い。かなり減つ  
てきただれど、店舗のウインドーでい  
つも気になる花がいけられているとこ  
ろもあるにはある。

それでもそんな花に足を止める人は  
希なようだ。みんな心に余裕がなくなつ  
てきたのだろうか。いけばなに魅力を感  
じられないが、それよりも魅力を感じる  
余裕がなくなってきたのではないか。

科学技術の進歩と共に、人の暮らし  
もせわしなくなつてきた。便利なもの  
がつくられると、時間をかけてじつく  
りつくることがなくなり、手塩にかけ  
てとか、丹精こめてとかいう価値観が  
忘れられようとしている。しかし一方  
ではこれではいけないと思う人も増え  
つつあるようにも思う。

そこで、華道人口を増やすにはどうす  
ればいいだろう。自分自身がいけばな  
に興味をもちはじめた時の事を思い出  
してみる。ウインドーの一輪挿しに目  
がいくようになったのは、いけばなを  
見る目が変わったのは、父がいけた花  
を見て「こんなんいけられたらいいな」  
と思った時からだつた。

そう考えると、いけばな復興のきっ  
かけは、人といけばなの「出逢い」が  
鍵になると云えないだろうか。花道人  
ひとりひとりが、周囲の人々にその出逢  
いを提供すればいい。肝心なのはその  
出逢いが心のこもつたものであること。  
一番はやはり誰かにいけばなを教えて  
あげるのがいい。職場に花をいけると  
か、最新のツールを駆使して花の写真  
を多くの人に見てもらう、なんてこと  
もありだ。

ここでもやはり「感動が人間を動か  
し、出逢いが人間を変えてゆくんだ  
なあ」である。

さて、華道人口を増やすにはどうす  
ればいいだろう。自分自身がいけばな  
に興味をもちはじめた時の事を思い出  
してみる。ウインドーの一輪挿しに目  
がいくようになったのは、いけばなを  
見る目が変わったのは、父がいけた花  
を見て「こんなんいけられたらいいな」  
と思った時からだつた。

そう考えると、いけばな復興のきっ  
かけは、人といけばなの「出逢い」が  
鍵になると云えないだろうか。花道人  
ひとりひとりが、周囲の人々にその出逢  
いを提供すればいい。肝心なのはその  
出逢いが心のこもつたものであること。  
一番はやはり誰かにいけばなを教えて  
あげるのがいい。職場に花をいけると  
か、最新のツールを駆使して花の写真  
を多くの人に見てもらう、なんてこと  
もありだ。

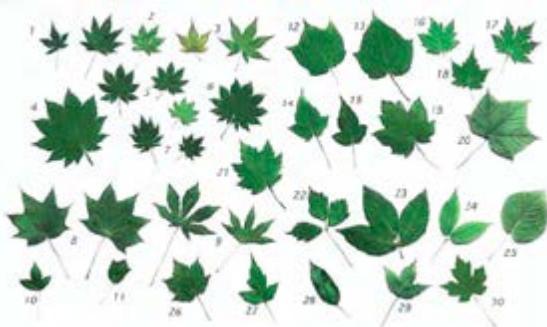
## カエデの見分け方

かえて  
9 頁の楓は、日頃イタヤカエデと呼んでいるが、正確にはハウチワカエデだと思う。

そこでカエデの識別方法として、葉の形とその名前を参考に紹介する。

1 イロハモミジ	11 タイワントウカエデ	21 オガラバナ
2 ヤマモミジ	12 ウリハダカエデ	22 ミツデカエデ
3 オオモミジ	13 ホソエカエデ	23 メグスリノキ
4 ハウチワカエデ	14 ヤクシマオタガカエデ	24 チドリノキ
5 コハウチワカエデ	15 ウリカエデ	25 ヒトツバカエデ
6 オオイタヤメイゲツ	16 ミネカエデ	26 アザノハカエデ
7 ヒナウチリカエデ	17 ナンゴタミネカエデ	27 カラコギカエデ
8 イタヤカエデ	18 コミネカエデ	28 クスノハカエデ
9 エンコウカエデ	19 カジカエデ	29 ハナノキ
10 トウカエデ	20 テヅカエデ	30 クロビイタヤ

はじめ  
林田甫 様のホームページ「カエデともみじ」より転載  
<http://mohsho.image.coocan.jp/report7.html>



## 事故から 4 年 4 ヶ月

仙溪

インターネットができる人は是非  
「 Chernobyl Prayer · Heart 」という  
短編ドキュメンタリー映画を見てほ  
しい。私は You · Tube で見つ  
けて見る事ができた。

1986 年に起った Chernobyl  
原発事故が子どもたちに与えた  
放射能被害の実態を 事故発生から  
16 年後に描き、2003 年米アカデ  
ミー賞短編ドキュメンタリー部門で  
オスカーを受賞している。約 40 分、  
日本語の字幕がつけられている。

こういう話をいきなり日常の中で  
するのは難しいので、ここに書かせ  
て頂いた。ネットの世界には妖しげ  
な情報が散乱しているが、監督のマ  
リアン・デレオさんに深い人間愛を  
感じたので、私はこのドキュメンタ  
リーで見たことが現実なのだと信じ  
ている。情報の見きわめに、発信者  
の人柄は重要な判断材料だと思つて  
いる。人を思いやる心を感じるかど  
うか。見て感じて、共に考えたい。

## 屋久島

かねてより一度訪れてみたかった  
屋久島へ行き、現地のガイドさんと  
共に森の中を彷徨つてきました。

最初の山歩きでは終始土砂降りの  
雨の中を歩いたが、おかげで存分に  
苔の美しさを堪能した。

有名な縄文杉に会いに行くのはま  
た次の機会にして、静かな森をひた  
すら歩いた。そして思ったことは  
自分の知っているどの山ともまったく  
違う感じ、一言で言えば生命力の  
次元が違う感じがした。

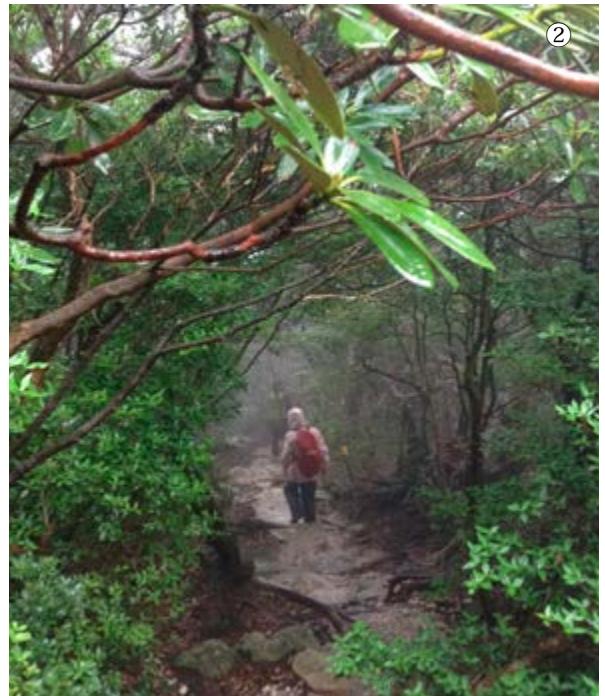
屋久島の山は花崗岩が隆起してで  
きたために、もともと地表に堆積層  
がなく、植物にとって土壤的に劣  
悪な環境だったが、多雨と深い霧の  
雨の中を歩いていたが、おかげで存分に  
苔の美しさを堪能した。



おかげで植物は少しずつ少しずつ成  
長してきた。根を張る土がないので  
強風で木が倒れる。するとその倒木  
を土台にして新たな生命が芽吹く。  
ゆっくり成長した木は緻密でなかな  
か朽ちない上に、朽ちても雨で流さ  
れてしまう。結局太古からの生命の  
循環が今もなお烈しく繰り返されて  
いるのが屋久島なのだ。

18年前の台風で倒れた蛇紋杉も見  
て来たが、仰向けになった根の裏側  
は真っ平ら。何百年もの間、花崗岩  
の上に立っていたということだ。そ  
してまた今後は次の世代の足がかり  
になるのだろう。

神々しい島 それが屋久島の印象。  
写真①標高千m付近の樅。②屋久  
島石楠花の森。③紀元杉。



## 竹と月と人といけばな

岡山の夏の研修会では、かぐや姫の物語をイメージして舞台に花をいた。

(8~9頁に関連記事)

「竹取物語」は日本最古の物語と云われているが、かぐや姫が竹から生まれたことと、最後に月へ帰るという奇想天外なストーリーからは、「自然回帰」というテーマを感じる。

富や権力からの誘いをかたくなに断りつづけるかぐや姫……。そういえば、中国にそんな話があった。紀元頃の嚴光（げんじょう）の逸話だ。後漢の皇帝となつた旧友光武帝からの手厚い誘いを一蹴し、富春山で自然に囲まれた無欲恬淡の暮らしを貰ひた。

嚴光のよう、山里で畑を耕し、富春江に釣り糸を垂れる、そういう自然な営みこそ尊いこととわかっていても、人は私利私欲を捨て去れないがゆえに、現実は混沌としていくものだ。そんなメッセージがこめられているのかも。

私達は竹や月と人の関わりをどれだけ知っているだろう。竹細工は化学製品に替わり、月の暦を使わなくなつて久しい。人と自然の繋がりを感じて、アンテナを無くしてしまったところ、そんなアンテナを育てることも、いけばなの役割だと思う。

## 月の暦と太陽の暦

今年の中秋の名月は9月27日だそつだ。ち

なみに来年は9月15日、再来年は10月4日と年によつて違う。旧暦の8月15日が新暦(15月)では、月が見えなくなる新月から各月がはじまつていて、なるほど毎月の3

日頃には、まさに三日月がでていたことに

なる。とても分かりやすい。満月は15日頃。

旧暦では7、8、9月が秋なので、中秋すなわち8月の満月を中秋の名月と呼ぶ。8月15日の月を十五夜、9月13日の月を十三夜と呼んで、どちらも月見をして月に供え物をしていた。十五夜は芋名月、十三夜は栗名月、豆名月とも呼ばれる。

一方で、太陽黄経の角度を元にした二十四節氣もあって、秋分の日はその一つ。旧暦では毎年日が変わり、新暦では毎年ほぼ同じ日になつていて、さて旧暦と新暦を比べると、旧暦のほう

が自然に添つた暮らしができそうな気がするがどうだろう。作物の収穫も月の満ち欠けにあわせていたと聞く。そのあたりのことを一度調べて書いてみたい。

## 陰陽五行

仙溪

私が陰陽五行に興味をもつてゐるのは、なにも陰陽師になろうなんてことではない。ただ、一人の華道家として植物のことをより深く知りたいという思いとともに、人と自然の関わりを見直すヒントがあるんじやないかと思うのだ。

陰陽思想と聞くとなんとなくかけ離れた古きよき迷信のような考へに思う人が多いだろう。まず陰と陽について、それぞれどのような定義があるのだろう。中国古代哲学としての考え方を見てみよう。

原初、宇宙は天地未分化の混沌たる状態であつたが、この「混沌」の中から光明に満ちた軽い澄んだ気、つまり「陽」の気がまず上昇して「天」となり、次に重く濁つた暗黒の気、すなわち「陰」の気が下降して「地」となつた。

このことは中国の古典、『淮南子』（紀元前一四〇年）の「天文訓」に書かれているが、同じ内容が「日本書紀」の冒頭にも引用されている。

この陰陽の二氣は、元來が混沌といふ一氣から生まつたというところが陰陽思想の要だと思う。（つづく）

## 「新たな気づき」

花道において、大師範の先生方が  
いける花には、なんともいえない雰  
囲気があるので、それは、その人  
それぞれにご自身の経験から得てこ  
られた、その人ならではの「気づき」  
の積み重ねが自然に出てくるのだと  
思う。

それに倣って一つでも多くの、素  
敵な「気づき」を得られますように、  
というのを、この一年のテーマとし  
たい。

陰の氣、陽の氣と云うが、そもそも  
も「氣」とはなんだろう。「生命・意識・  
心などの状態や働き」「天地に生じ  
る自然現象」「あたりに漂う霊界氣」  
などと説明されるが、要するに様々  
な「状態「働き」を「氣」ととら  
えることができる。

ものの状態や働きはその性質が強  
いときもあれば、弱い時もある。さ  
らに極まって逆の状態や働きに軽じ  
たりもする。単純にこれは陰、これ  
は陽というふうにすべてを二つに分  
けておしまいではなくて、陰的なも

のの作用と、陽的なものの作用を  
知つて、それらの調和と、その間に  
どんな流れが生じるのか、それらが  
交わって何が生まれるのか、という  
事象の理解が重要となる。  
陰と陽、この二氣の働きによつて  
万物の事象を理解するのが陰陽思想  
なのだ。森羅万象、宇宙のありとあ  
らゆる物は、相反する陰と陽の二氣  
によつて消長盛衰し、陰と陽の二  
氣が調和して初めて自然の秩序が保  
たれると考える。  
陰と陽のそれぞれの性質を表にし  
てみよう。

偶数 女性 夜 冬 月 地	遠心力 膨張、拡散 上昇 軽い 暗い 柔らかい 温潤 冷たい 穏やか	陰
奇数 男性 昼 夏 太陽 天	求心力 収縮、融合 下降 重い 明るい 乾燥 硬い 熱い 活発	陽

小林益夫氏の「風幡亭雜記帳」より転載。原文は「新編漢文大系71 唐宋八大家文讀本(二) 星川清孝著 明治書院」

### 「種樹郭橐駝傳」

柳宗元（773～819）

通釈

郭橐駝は、そのはじめは何という名であったか分からぬ。背の曲がる病氣で、背がもり上がりつぶしになつて歩くのが、駱駝に似ているところがあるので、それゆえ郷の人は駱と呼んだのである。駱はこれを聞いていつた、甚だ善い。私を名づけてまことに当たつてゐる。それによつて彼は自分の名を捨てて、彼もまた自分で橐駝といつたということである。その郷を豐樂郷といふ。長安の西にある。駱は樹を植えることを仕事としていた。およそ長安の豪族や金持ちで物見遊山の庭を作らる者や、果実を売る者などは、皆争つて駱を迎へて彼の培養と視察とを請うのであつた。駱が植えた所の樹は、遷し易えることがあってもよく根がつき活きて、大きくなり茂つて、早く実がなり植えないものはなかつた。ほかの植木をする者が、うかがひ見て見習い慕つても、それに及ぶことのできるものがなかつた。これを尋ねるものがあると、彼は答えていう、橐駝は木を生

命長く、その上茂らせることができるのではない。木の天然自然に従つて、その生まれもつた生きる働きを導くことができるのである。およそ樹木の性は、その根本はまつすぐに伸びるようであつたか分からぬ。背の曲がる病氣で、背がもり上がりつぶしになつて歩くのが、駱駝に似ているところがあるので、それゆえ郷の人は駱と呼んだのである。駱はこれを聞いていつた、甚だ善い。私を名づけてまことに当たつてゐる。それによつて彼は自分の名を捨てて、彼もまた自分で橐駝といつたということである。その郷を豐樂郷といふ。長安の西にある。駱は樹を植えることを仕事としていた。およそ長安の豪族や金持ちで物見遊山の庭を作らる者や、果実を売る者などは、皆争つて駱を迎へて彼の培養と視察とを請うのであつた。駱が植えた所の樹は、遷し易えることがあってもよく根がつき活きて、大きくなり茂つて、早く実がなり植えないものはなかつた。ほかの植木をする者が、うかがひ見て見習い慕つても、それに及ぶことのできるものがなかつた。これを尋ねるものがあると、彼は答えていう、橐駝は木を生

根は拳のよういかがまつて土は前と変わり、その土を寄せ養分をやるのに、もし度を過ぎるのでなければ足りない。かりそめにも是に反して良くやついても、また木を可愛がつていつくしみうにと欲し、その土をかけ養うことは平均していることを欲し、その土壤はもと植えてあつたものであることを欲し、その根本の土を固めるには密ですき間のないことを欲するのである。すばらしくしてしまふと、あとは動かしではならない。心配もしてはならない。そこから立ち去つてあとは二度と振り返り見ないがよい。その植える時は子を育てるときのように大事にし、植えて手放すときは棄てるようにすれば、その木の天性はそこなわれず完全である。それゆえに私はその成長を害しないだけであつて、それを大きくし茂らせふやすことができる力があるのではない。そのなる実を抑えへらすことをしてないだけであつて、それを早く実らせ多く殖やすことができる力があるのではないのである。

問うものはいつた、お前のやり方を、役所の政治に移して行うことができるだろうか、と。駱はいつた、私は植木のことを知つてゐるだけである。政治は私の仕事ではない。しかし私は村に住んで人の長であるものを見ると、

好んでその法令を面倒にして、大変人を憐れんでいるようでありながら、結局人民に禍ををしている。朝に晩に役人が来てさけんでいう、役所の命令でお前たちの耕すことをうながし、お前たちの作物を植えることをばげまし、お前たちの収穫を監督する。早くお前たちの糸を繰れ、早くお前たちの糸を織れ、お前たちの幼児を育て、お前たちの鶏や豚を十分に成長させよ、と。鼓を鳴らして人民を集め、拍子木を擊つて呼びつけるのである。私たち農民は食事をやめて、それで以つて役人をねぎらいもてなすのですらも、また暇がないのである。その上どうして自分たちの生活を繁昌させて、自分たちの生きるために心の働きを安全に保とうか。とてもできるものではない。それゆえ、病んでその上仕事を怠つてしまふ。このようであれば、政治も私の仕事と、それこそ似ているところがあるのであろうか、と。問うものは喜んでいつた、それも善いではないか。私は樹を養うこと尋ねて、人を養う術がわかつたと。このことを書き伝えて、それを役人のいましめとするのである。

(橐駝=袋のこと。橐駝=ラクダの正名。)

古書に習う

7頁で紹介した「種樹郭橐駝傳」

三三八年前の流祖のメッセージを受け取ったみたいな、不思議な思いがしている。さらに、たまたま新潟の庭師さんがこの古書の紹介をされていましたお陰もある。世の中には知らないことがなんと多いとか。でも、求めていればきっと新たな出逢いや気つきが得られるのだ。

花 あるからこそその 心 広めたい



## 京都いけばな協会新会長 桑原仙溪さんに聞く

テキスト 635  
2016 年 5 月

陰陽五行

私達人間も自然の一部。前回紹介した陰と陽の性質や働きを繰り返し、また調和を保つことで生きている。素朴な例をあげれば、無意識でしている呼吸も吸って吐いてを繰り返しているし、「むすんでひらいて

「」のようにグーとバーを繰り返すことで血行が良くなる。活発な昼のあと穏やかな夜があるからまた一日頑張れるというように。私達には陰と陽の両方が必要なのだ。(つづく)

京都を拠点に活動するいけばな33流派でつくる京都いけばな協会の新会長に、華道桑原重慶流家元の桑原仙溪さん（55）が就任した。副会長として会の運営に携わって6年。新たな責務を担う桑原さんに、いけばな文化への思いや花を生ける心について聞いた。

(太田敦子)

# 「文化として学校教育の中に」

いよね」と思つてもらえるような企画ができます。  
いけばなは決して特別な存在ではなく、日々の暮らしを豊かにする一つのツールとして捉える人が増えることに期待している。

今、流祖が残した書物を読み返している。

江言 時代初期に流祖が書き残したものを見ているが、現代に通じる考え方があたくさんあることに驚く。例えば「木に接する時には自然に従い、生まれ持った働きを導くだけ」

「いけばな」の魅力をどうやって伝えていくか。  
「いけばな」には芸術的な側面ももちろんあるが、私は東日本大震災後に東北を訪れた際、花があつたからこそ見知らぬ人たちと心を通わせることができた。 「いけばな」を習うことでの新しい交流が生まれ、心を込めた作品が家庭や会社で生かされる——そんな存在意義を問い合わせたい。若い人が「何かやりたい」とアンテナを張った時に、「いけばなってやっぱりいいよね」と思ってもらえるような企画がければ。

いけばなは決して特別な存在ではなく、日々の暮らしを豊かにする一つのツールとして捉える人が増えることに期待している。

——今、流祖が残した書物を読み返している。

江戸時代初期に流祖が書き残したものを見ているが、現代に通じる考え方方がたくさんあることに驚く。例えば「木に接する時には自然に從

といった記述があるのですが、非常に奥が深い。力ずくでねじ伏せようとするのではなく、植物を敬いつつ植物のことを知ってよさを生かす。この考え方にはいけばなしとどまります。社会生活のさまざまな場面に置き換えられる。会長として、いけばなしを通したこういう考え方を広く伝えてゆきたい。

が、この動きをどう活用するか。  
「文化移転などの追い風もある  
文化を暮らしの中に息づくものと  
して定着させておく好機だと思って  
いる。その一つの方法として、学校  
教育の中に入授業としていけばなを入  
れたいと協会を挙げて頑つてやる。  
勉強というよりも、子どもたちが「文  
化って楽しいな、興味深いな」と思  
つてくれる機会になれば。習ったい  
ければなを家で生けて家族に褒めら  
れ、「ありがとう」と言ってもらえ  
る。そんな経験を積むことができ  
ば、暮らしにいけばな文化が貢献で  
きるのかなと思う。

(京都新聞 7月17日朝刊)

テキスト 638  
2016年8月

## 陰陽五行

「陰気な人」「陽気な人」などと聞  
くと、陰が悪くて陽が良い、と誤解  
するかもしれないが、決してそうで  
なく、すべてのものに役割を見い  
だす考え方が陰陽のものの考え方だ。  
違った役割を持つ対極のもの同士  
が互いに助け合い、新たなるものを  
生み出すという思想。

陰とは、冷たい、暗い、柔らかい、  
ゆつくり、大きい、精神、女、こう  
いった性質。

これらの性質は絶対的なものでは  
なくて、相対的なものなのだ。

植物と動物では、動かない植物は  
「陰」で、活発に動き回る動物は「陽」  
と見ることができる。

植物においても、天（陽）へ向  
かって成長する部分は「陰」、地（陰）  
に向かって下降する部分は「陽」と  
いうふうに、陰陽の調和でなりたっ  
ている。

陰は陽を求める、陽は陰を求める。  
男と女、磁石のN極とS極が引き合  
うのものこの原理。

調和のとれたいければなは、陰陽な  
どと意識することなく、硬いものと  
柔らかなもの、伸びるものと集まる  
ものというとり合わせをしている。  
そんなバランス感覚が、世の中のす  
べてのものに共通して大切なのだ  
と、陰陽を知つて改めて思う。

## 巨人のいけばな感

今月の表紙の器を作られた柳原睦  
夫さんに聞いたお話を。

柳原さんは前衛化道家の中川幸夫  
氏と親交があり、「手を入れるのが  
怖い」と思うような器を作つてよ。  
そしたら僕が命がけで花をいけるか  
ら」と言われたそつだ。

その言葉から真剣勝負の緊張感を  
覚えた。中川幸夫氏は、いけばなに  
どんな思いを持っていたのか。  
いけばなに対する思いは人それぞ  
れだ。経験とともに思いも深まるが、  
それぞれの時点の真剣な思いは、ど  
れも皆いけばなにとって大切な要素  
なんだと思う。

でも、自分には無い、より深い  
けばな哲学に触れるることは、自分  
のいけばなにとって貴重な暗示にな  
る。先の言葉に合わせて、私がこ  
れから花をいける時、きっと何かが  
違つてくるだろう。

「誰に愛想笑いして頭下げること  
ものうて、土の上に立つて自分で耕  
して、ミカン作つて家建てて子を育  
てて、こないな誇りあれへん。孫ま  
で見せてもろて、有難すぎておつり  
くるわ」（惣兵衛・あさが来た）

工藤和彦先生の「アンデスの花影」  
という作品集では、古代ペルーの土  
器に、不思議な形や色彩の植物がい  
けられている。そこには花と器の出  
逢いを心から楽しんでおられる工藤  
先生を感じて、やっぱりいけばなは  
そなんだと納得する一方で、真剣  
勝負の凄みに打ち震えてもいる。  
二人の巨人のいけばな感は、多く  
の人に影響を与えていた。

## 朝の連続テレビ小説

仙溪

好き嫌いはあるだろうが、私はN  
HKの朝の連続テレビ小説をほぼ欠  
かさず見ている。そして時には登  
場人物のセリフを書き留めることも  
ある。

東北の大震災と原発事故以来、人



ゴンチャン先生と  
レモン師匠

日々のいけばなを紹介したくて、  
家で飼っていた猫の「ごんちゃん」の写  
真を混ぜ、「ゴンチャン花日記」とい  
うブログを始めたのは、私が家元を  
襲名した年だつた。その後「ごんちゃん」  
がお星様になり、3年後にレモン  
がやつってきた。今は「ゴンチャン先  
生」と名のつてインスタグラムとい  
う所に写真を投稿している。いつも  
花を見に来るレモンは皆に愛され  
る「レモン師匠」と呼ばれている。

猫に助けられ、時には教わること  
も多いくらいだが、花も猫も人間も命  
を育む仲間なんだなあと、しみじみ  
感じている。今後とも、「ゴンチャン  
先生」と「レモン師匠」のコンビによろし  
くお願いします。

## 二〇一七年・平成二九年 丁酉（ひのととり）

今年は酉年。十二支のいわゆる干支で云うと「丁酉（ひのととり）」にあたる。

「酉」は草木の形態の充実した状

態。発達の最終段階。

「酉」は果実が成熟の極限に達し  
た状態。また酒樽の中で酒が発酵し、  
熟し、成る様を表している。

このような解釈から、今年は機運  
が熟して新たな勢力が発し、革命の  
岐路となると解説する人もある。

古代の中国で考えられた「干支」  
は、植物の成長の過程を十と十二の  
字で表し、その六十の組みあわせで  
できている。

植物は種子から芽を出し、太陽に向かって伸び、枝を広げ葉を茂らせ、花を咲かせて実をむすび、種に新たな未来を託す。人はもちろんのこと、時代の流れも植物の営みに似た変化を繰り返しているのだろうか。

そういうえば竹の花は六十年に一度咲くという。干支の数と同じだ。

先人達は自然から多くの事を学んできたが、私達はその多くを忘れてしまっていいだろか。それらを未来へ引き継げるだろか。

自然の恵みに感謝し、自然を尊ぶ

気持を伝え、健やかな心を育む仕事を

新たにしている。

## 立華時勢粧の時代

今月号の「立華時勢粧を詠む」  
の中では「本草に時珍曰く」とか「藻  
塩云う」などあるのは、参考に  
した書物の名前やそれを書いた人  
の名前なので、紹介しておく。

李時珍

（1518年（正徳13年）～  
1593年（万曆21年））

字を東壁、号を「瀕湖仙人」と  
いい、中国・明の医師で本草学者。  
中国本草学の集大成とも呼ぶべき  
『本草綱目』や、奇経や脉診の解  
説書である『瀕湖脉学』、『奇經八  
脉考』を著した。

現在の湖北省で、代々医師を務  
める家に生まれた李時珍は、幼い

頃から、父の助手をしながら育つ  
た。子供の頃から病弱だった時珍

は、医学への思いが強く、才能は  
たちまちに開花して、名医として  
名を知られ、明の皇族である楚王

までが彼を頼るようになった。そ  
して、時珍34歳の時に、明朝にお  
ける医学の最高機関であった「太  
医院」に推薦を受けて、北京に赴

く。だが、彼には中央の役人は性  
に合つていなかつたらしく、1年  
後には帰郷をして、再び地元で医  
業を始める事となつた。

中国の本草学は、神農が全ての  
薬草、毒草を食べて作ったとされ  
る『神農本草經』を原典として、  
書き集めたもの』の意。

多くの増補が繰り返されてきた。

だが、時代が下るにつれて、名称  
や薬効についての誤りや、重複、  
遗漏が多数含まれるようになつて  
いった。李時珍はこれを憂慮して、  
新しい本草学書の編纂を志す。参  
考にした書物は800種、彼自身も多  
数の薬物の実物を收集して研究を

重ね、26年の歳月を費やし、61歳  
の時に、『本草綱目』全52巻190万  
余字をもつて完成させた。

最初その出版は神農を軽視する  
ものとして事实上閉ざされる事  
となつたが、李時珍に理解を示す  
人たちの奔走で、1593年に南  
京で出版、時の皇帝万曆帝への献  
上の機会を得、万曆帝から賞賛さ  
れて、出版に便宜が図られる事に  
なつた。

この本は日本などの周辺諸国の  
みならず、ラテン語などのヨーロッパ語にも訳され、世界の博物  
学・本草学に大きな影響を与えた。

月村斎宗穀編 10冊。1669  
年（寛文9年）刊。

連歌を詠むために用いるもの  
で、古典等から語句を集め、注解  
を加えた書。20部門に分類されて  
いる。藻塩草は藻塩をとるために  
使うが、その際搔き集めて潮水を  
注ぐことから「書き集める」のか  
け言葉になつた。本書の題は「書

## 立華時勢粧の「紅葉一色と桜一色」

先月と今月で紅葉と桜の一色立花を 6 図掲載した。

「桜は諸花の頭、楓は紅葉の長」

と書かれているように、極めて大切な立花図が連続で登場したことになる。百十八図のほぼ最後に登場し、それすべてが見開きの図版である

ことからも、力の入れようが伺える。

「紅葉を尊敬する心」「桜を尊美す

る心」から、「ほかの草木をとり合わ

せる場合、紅葉には「紅葉しない草

木」や「色有るを嫌つて菊も白花」、

桜には「花の咲くことのない草木を

あしらいだけに」用いるようにし、

あくまでも紅葉を引き立て、あくま

でも桜が主役となるような配慮をも

とめている。自然の美に対する敬意

が強く感じられる部分だ。

「高雄山の紅葉のように峰より染

め」「吉野山の桜のように麓より咲

く」ように立てよとは言うけれど、

「伝授多くある」ので初心のうちは

これを立てないようにとも書いてい

る。この部分を私なりに解釈するな

ら、高雄山や吉野山のようにしない

といけないなどと囚われるよりも、

まずは手にした枝をのびのび生かすことの方が多い大事なんだよと言つてい

るようと思つ。

実際の立花図を見てみると、紅葉については 2 つの図で峰より染まつていてるようだ。紅葉だけで、紅葉だけで



立てた真の一色にはそれは感じられない。先月号でも述べたが、一本の楓の大樹のようである。

一方、桜の立花図を見てみると、一見どの枝も少しの薺がのぞくものの、ほぼ満開のよう見える。桜はこだわりなく自由に立てているのだなと思つたが、よくよく見ると「砂の物」の控枝と流枝には薺が極めて少なく、真や請の梢に薺が多めであるようを感じる。麓から咲き上る様をさりげなく写し取つてゐる。

また、紅葉と桜の図を見比べると、楓には晒木、桜には苔木がそれぞれ効果的に使われてゐる点にも注目したい。肝心なのは自然を手本にするということ。

そして又、桜を詠んだ聖武天皇の詩が面白い。一つの漢字を一度はそのまま読み、もう一度は二つの字に分けて読むというユニークさに驚かされる。他にも中国の杜牧や王安石の詩を引用しながら花の知識を深めさせてくれるなど、豊かな教養に加えて、読む側を花の世界へ引き込むような文章の力を感じる。

立花時勢粧の中でも特別な 6 つの図を掲載したことで、この連載の責任の重みのようなのを改めて感じている。流祖の技や思いや心といつたもの、選ばれた詩や言葉たち、そして絵図から読み解く様々な教え、それらを一つでも多く手に入れるための手がかりとして、内容の紹介を続け、深めてゆきたい。



人々が花を愛で、お茶を愛し、香りを楽しみますが、京都に生まれ日本で発展してきた、いけばなもお茶も香も哲学今まで進化させたのは京都です。「はんなり」という言葉は、そもそもは「花あり」です。花と人間の生き方、暮らしの美学と哲学を融合させ、花により人を育ててきた歴史や街づくりがあります。それを大丸さんが応援し続けてこられたのが、この華道京展でしよう。33もの流派が仲良く切磋琢磨し連携するのが、京都のすごさですね。

■桑原仙溪・京都いけばな協会会長  
日本文化をリードしてきたのが、

大丸創業300周年記念鼎談  
「京都の文化といえばな」

――京都は「いけばな発祥の地」と言われます。なぜ京都でいけばなが生まれ、その魅力が衰えずに続いているのでしょうか?

■門川大作・京都市長　京都の歴史は精神文化と物質文化が融合し、心と物が刺激を与え合って進化してきました。その背景に人々の絆や自然との共生や宗教的情操があります。いけばなも、お供えする俳花が原点ではないかと思います。今、世界の

■丹羽亨・大丸京都店長 この華道  
京展は昭和25年からスタートし、大丸  
は昭和36年から関わる半世紀やらせ  
て頂いています。大丸は今年で創業  
えてきたと思います。そんな京都に  
文化庁が移転します。

た。いけばなは人に安らぎを与えてます。京都は世界でも尊敬される街です。来店される外国の方が増えていくますが、物だけではなく芸術や文化にも興味を持たれている。今後も京都の文化の良さを世界の方々に紹介できるよう、微力ながら貢献できれば

— いけばなの未来や可能性について  
どうお考えですか？

気持ちを持つ人が多かったです。室町の足利将軍、利休、光悦、宗達らのように、近く映画「花戦さ」が公開されますが、新たな美を生み出そ

のよう。近く映画「花戦」が公開されますが、新たな美を生み出そうとしていた時代の空気を感じられるのではと期待しています。いけば

――いけばなの未来や可能性についてどうお考えですか?

一層力を入れなければならないと思  
います。

きました。東北の被災地でも一緒に花を生けている中で打ち解けることができた。お花はそういう力があります。

トしました。その言葉の本質をもう一度見極めたいと思っています。顧客第一主義と社会的貢献の意味を噛みしめて、京都の方々に支持されて

■門川 絶対ないですね。日本の華道の最高峰じゃないですか。

ちが通じ合う。いけばなも回を重ねていると、花の方から心を開いてくる。日本二の三通つて、ここま

所を復活させられないだろうか、と思っています。

300周年。1717年、伏見で当

と思っています。

ますが、街の至るところに御地蔵さ

300周年。1717年、伏見で当時は小さな呉服商だったのですが、徐々にいろんなものを取り扱い百貨店となる中で「物」だけでなく「事」にも重きを置き、文化によるところ

■桑原 今年の正月から大丸京都店では、ダウン症の書家と画家による「生きる想」が開かれました。

ますが、街の至るところに御地蔵さんがまつられているような街は他にありませんね。日本の文化のすごさは暮らしの中、衣食住と地域社会の中になります。ヨーロッパ文化は上

自然に感謝する。人も自然と共に絆を大切に生きる。よく京都のお勧めの観光の場所は、と聞かれると、京都の街ではどこでも御地蔵さんがまつられていて、きれいな水と生花がお供えしてある、と言つて紹介します。世界に宗教都市はたくさんあります。

しさを取り入れていくという意味だと思いますのですが、それはいけばなにも通じるものがあると思います。それをテーマに打ち出しながら、68回目の華道京展を華々しく開催とともに、今後も京都のために頑張ってまいりたいと思います。

## ペンフレンドに会いに

母・素子の妹 章子さんには、中学生の頃に文通を始めたドイツ人女性の友達がいる。6月に会いに行く

というので、アメリカへ同行した。

章子さんのペンフレンド、カリンさんはオペア留学（海外ホームステイ先でベビーシッターをしながら学校に通う）でアメリカを訪れた時、同じくドイツ人留学生と出会って結

私達4人（もう一人、カリンさん繋がりの友人、花苗さんが加わって）はカリンさんの家に寝泊まりして、一緒に食事をつくったり、公園で散歩したりしながら、新たな親交を育んだ。



①



②



④



③



⑤



カリンさんに強く勧められて、章子さんと私達の3人で、ヨセミティ国立公園にも行くことが出来た。花崗岩の岩山に囲まれた、緑豊かな渓谷だ。特に春から初夏までは雪解けと雨によつて雄大な滝が生まれる。なんかでも北アメリカ最大落差のヨセミテ滝は、公園内のいろんな場所から見る事ができ、遠くからの眺めがなんとも美しい。

いる。私達もヨセミテ滝の下滝を見に行つたが、森の中を流れる川をたどりながら、平坦な遊歩道を歩く樂

して単身アメリカへ渡つた強者。つわもの

子さんと私たちの3人で、日セミニア国カリンさんに強く勧められて、章里。私達もヨセミニア滝の下滝を見に行つたが、森の中を流れる川を行ながる、平田な遊歩道を歩く樂どりながら、

して単身アメリカへ渡った強者。  
③カリンさんファミリーとの朝食。

しいコースだつた。

④⑤ファーマーズマーケットには色々

とりどりのオーガニック野菜、果物  
が。ジャガイモとブロッコリー。

⑥ヨセミニテ滝の下滝でマイナスイオノを計測する。

ンを満喫する。

⑧ホテルで。窓<sup>くつろ</sup>の空間<sup>くうかん</sup>が奥<sup>おく</sup>へ続く。

⑨日本で花をいけてねど、カリンさ  
し夫妻二つ、ミヅヒニヤノニイフ

ん夫婦はいたたいたアンテークの水指に、赤いバラとサンキライで出

逢い花をいけて写真に撮つた。

卷之三

A photograph of a woman with short dark hair, wearing a white shirt, smiling at the camera. She is standing in a grassy field with a dense forest and a rocky mountain in the background under a blue sky with white clouds.

A person's hands are shown playing a long, orange didgeridoo. The background features a lush green field, a dense forest, and a rocky mountain under a clear blue sky with a few white clouds.

A vertical photograph of a woman wearing a white vest over an orange shirt and a matching orange and white striped scarf. She is standing in a grassy field with a large, snow-capped mountain visible in the background under a clear blue sky.

A photograph showing a person's arm and hand reaching out towards a scenic mountain landscape. The mountains are rugged with patches of snow and green forests at their base under a clear blue sky with a few wispy clouds.

VOLUME 10 NUMBER 1

100

100

7



### 桑原專慶流のいけばな

桑原專慶流は、京都で江戸時代前期に生まれ、三百年以上続く華道の流派です。流祖の桑原富春軒仙溪は、公家や武家、寺院の床飾りとして発展していた立花の名手でした。卓越した知識人で、当時の植物学にも造詣が深く、その学識を存分に駆使して一六八八年（元禄元年）に「立花時勢粋」（全8巻）を出版しました。その中で述べられている花道論は、今日までいけばなに大きな影響を与え続けています。

流祖は自然を敬う心を何よりも大切に、自らの心眼で美の極みを探り、そこから感受したものを自由闊達に表現しました。秀麗で理知的な気風も特徴です。ただし、本質を見極めなければ、何ものにもとらわれない本当の自由は得られません。技を磨くだけでは駄目なのです。この道理をしつかりと踏まえて、一人ひとりが自らの奥深くに秘めている個性や創造性を鮮やかに開花させる。それが代々継承し、目指してきた桑原專慶流のいけばなです。

藤井隆也さんは京都鶴谷大で日本画を学ばれ、ドイツ留学を契機にその伝統的な様式や素材にこだわらぬい、現代美術のフィールドに活動の領域をひろげてこられた。

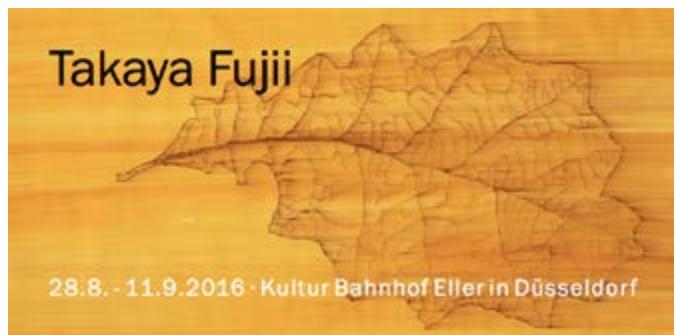
桑原專慶流の師範でもあり、日本の「いけばな」への深い思いを持つおられる。日本、ドイツ、スコットランド、イギリスを行き来して制作と発表を続けておられるが、昨年と今年には、「いけばな」と深く関わりを持った芸術表現の試みをされた。

昨年デュッセルドルフでの2週間におよぶ展覧会では、262枚の枯葉を拡大して描いたものが、部屋の壁を埋め尽くし、床に置かれた白い水盤には水が張られ、オークの枝が立つ。さらに檸の実、枯葉、青葉、それぞれを使った印象的な作品が置かれている。

枯葉一枚一枚との対話が絵となり、葉や実の命の輝きに対する藤井さんの感動がオブジェから伝わってくる。そして毎日押し変えられる生の枝によって、彼の自然との関わりを感じることが出来る。

藤井さんは京都の御室仁和寺の近くに住まいがあり、ここ20年間、日本にいる時はほぼ毎朝、仁和寺の裏山を散歩して、自然の移ろいに目を向けてこられた。

そんな中で、散り椿が人に踏まれ



毎日ドイツの森を歩き、オークの枝を集め、ギャラリーに生ける。藤井さん独自の表現は、いけばなの深奥と繋がる。



## 高松・栗林公園



①



②



③

栗林公園にて。①南庭全景。②松と。③薩摩藩寄贈の蘇鉄。

香川県は古くから讃岐国と呼ばれる。これは、国の形を見た時に、四国との他の国に比べて横幅が狭いことから「狭緯」（緯=東西の距離）と呼ばれていたのが、「讃岐」に変わつていったそつだ。

讃岐といえば、「讃岐」「白」とよく云われるけれど、三つの白いものが何かと聞かれて正確に答えられるだろうか。正解は綿、砂糖、塩である。

讃岐は晴れの日が多くて雨が少ないため、常に水不足と闘つてきた。米作りのために作られた溜め池は一万四千余り。そのようにして苦労して米をつくる一方で、自然条件を

生かした特産物として生まれたのが綿と砂糖と塩であった。

イサムノグチ庭園美術館、屋島寺、港の倉庫跡を利用したアートスポット、とても長いアーケード商店街、綿花や砂糖黍は、温暖で雨の少ない気候に適した作物。そして塩づくりには広い遠浅の海岸と晴天の日が多いところがむいている。

近年「うどん県」と呼ばれるほどのブームとなつている「うどん」。こちらも日照時間が長いため、古くから二手作によって小麦の生産が盛んで、うどんに慣れ親しんでいたことも背景になつてているようだ。

高松港から南へ約3キロ。紫雲山の東麓に位置し、面積75ヘクタールは文化財庭園としては国内最大の広さだそうだ。四百年近い歴史をもつ大名庭園である。

なんといつても低く拵えられた松の見事なこと。香川といえば鬼無や国分寺という松の产地が有名だが、めであつたが、朝の手直しのあとは松の生育に適した土壤と、松の手人技が優れているのだろう。

栗林公園では丁度松の選定作業をさせていたが、一千本の松の手入ればさまざまなものだろう。庭園内の小川では、ついた藻を5人の男性が籠で一つ一つ丁寧にこそぎとつておられた。気の遠くなる作業である。

昔、飢饉のとき、高松藩2代藩主の松平頼常は、被害に遭つた人々を雇つて庭園拡張をおこなつた。その土地に根ざした文化の底力を感じた。いつか是非とも鬼無の松栽培も見てみたい。

ト、とても長いアーケード商店街、うどん屋、骨付き鶏なども堪能した。どれも印象に残るものだったが、とりわけ感銘を受けたのが「栗林公園」である。

高松港から南へ約3キロ。紫雲山の東麓に位置し、面積75ヘクタールは文化財庭園としては国内最大の広さだそうだ。四百年近い歴史をもつ大名庭園である。

昔、飢饉のとき、高松藩2代藩主の松平頼常は、被害に遭つた人々を雇つて庭園拡張をおこなつた。雇用を生んで民を救つたわけだ。そんな藩主が愛した庭園ゆえに、高松の人々も愛着と誇りを持つ

## 乱世の「茶」と「花」

昨年公開された映画『花戦さ』は、天下人である秀吉と、茶の利休と、花の専好の関係が軸になっている。

とりわけ利休と専好の茶室でのやりとりの場面が強く印象に残った。

専好はじめて利休の点てた茶を飲んだとき、何か大きな温かいものに包み込まれ、心が解けてゆくを感じて涙する。庭、茶室、そこに生けられた花、会話、所作、それすべてが温かな心で満ちていたのだろう。戦乱の世にあって、利休の茶によって心を癒やし、心を清めることができた武将たちのことを思った。

映画の後半、秀吉の怒りを買った利休に対して、心配でしかたのない専好は「上様に詫びを入れられればいいではないですか。これも『もてなし』だと思つて、包み込むように詫びを入れればいいではないですか」と言う。その言葉を聞いた利休は「もてなしが、私はいつの間にか大事なことを忘れていたのかもしれないな」とつぶやく。強く印象に残る場面だった。温かく包み込む心。これこそ、究極の茶であり花である。そんなメッセージが込められている。

茶と花の二人の偉人。ともに命をかけて茶の道、花の道を守り貫いた。そしてその道を、私達も歩んでいる。

## 見方を変えてみる

今年は明治維新150年にあたり、大河ドラマも西郷隆盛が主人公。今なお人気を博す「西郷どん」のように、大きな眼で遙か遠くを見つめ、視野を広くもち、「己の道を俯瞰する」そんな年にしたい。と、カツコ良く言つてはみたが、健康で日々の仕事を精一杯できればなによりだ。

でも、今までどちらと違つ物の見方をしてみると、新たな発見に結びつくきっかけになると思う。自分の中に眠つていたものが目覚めることもあるに違いない。視野を狭めず、柔軟に見方を変えてみようと思つ。

いけばなでも、普段使わない器にいけると、いつもと違う花になつたりする。また、いけた花を一度少し離れた所から見なおしたり、別の角度から見ることで、足りないところに気付くこともある。「見方を変えるのは大事なことだ。

## 純米吟醸「仙櫻」

偶然にも私達二人の名前が合わさつたお酒をお弟子さんが見つけてくださつた。但馬の国の長寿の桜(養父市大屋町)がこの名前で呼ばれているそうだ。

兵庫県宍粟市の山陽盃酒造の純米吟醸酒で、蛇紋岩米をブナ原生林の自噴水で仕上げ、明延鉱山坑道の地底に寝かせて熟成させるそうだ。自然の恵みが、人の手により発酵という過程を経て新たに生まれ変わる。お酒づくりも、人と自然の共同作業という点で、いけばなと同じだなと思う。

いけばなもいける人のイメージの醸成によってより深いものになる。



天台圓淨宗大本山  
廬山寺 節分鬼おどり

京都の廬山寺（廬山天台講寺）では、2月3日に追儺式鬼法楽（通称、鬼おどり）が執り行われる。今年はご縁があつて、私と櫻子も豆まき役を務めさせていただいた。

人間の煩惱を表す赤、青、黒の鬼3匹が、邪気払いの弓矢と本堂での護摩焚きによつて退散。その後境内に蓬萊豆や福餅がまかれ、それを参拝者が厄よけ開運を授かるために手を伸ばして取ろうとする。

豆は「魔滅」に通じ、邪氣を追い払つて一年の無病息災を願う。

廬山寺はもともと比叡山延暦寺の中興の祖である良源により天慶元年（938年）に京都の北山に創建された。良源は元三天師（1月3日が命日なので）慈惠大師（朝廷から贈られた名）、また角大師、豆大師、降魔大師、魔除大師など多くの名前が伝わり、節分に特別開帳される歴史ある行事に参加させていただけたことに感謝するとともに、皆さんの無病息災を切に願う。



角大師



横浜の西洋館に春をいける  
4月1日～2日 外交官の家 插花13名



## 西洋館に春をいける

会期 4月1日～2日

会場 外交官の家

指導 横浜山手西洋館の一つ  
仙溪・櫻子

家元東京教室の皆さんと一緒に「外交官の家」に花いた。公益財団法人・横浜市緑の協会が管理し、一般に無料公開している7つの西洋館のうちの一つで、もとは渋谷にあった内田定植(明治政府の外交官の邸宅だ)。

「6月6日はいけばなの日」とは、何事も6才のその日に稽古を始めるといいという故事からきているが、甥の健一郎(ケンチャン)が素子先生(ホッホチャン)にいけばなを習いだしたのは3才だった。毎週月曜日の夜、お弟子さん達に混ざって花をいけていた。その間「テキスト」に連載された「ホッホチャンとケンチャン」の貞も、皆さん楽しみにして下さっていた。

その彼もこの秋には22才になる。スポーツが好きな好青年。家では女性軍によく怒られているが、そんなことはへこたれない。明るく優しいのが取り柄のようである。そして近頃、自分にとつての「いけばな」を見つめなおしているようだ。

花々で各部屋を飾らせていただきたい。私達の花を見て、来館された人達の表情が和む。そして花を見に旧館が集まり、再開を喜ぶ場面も。

関東支部長の佐藤慶由さんの父は60年前、ブラジル移民事業50周年記念行事の準備のため、領事としてブラジルに赴任、その時の総領事、副領事の子供達8人が、60年の時を越えて西洋館に集わられた。今年はブラジル移民110周年にあるが、最初に移民事業に尽力したのが内田定植である。内田大使ご夫妻も、縁ある再開を喜んでくださっているのではと、お話を花が咲いたそらである。

## ケンチャン

テキスト 661  
2018年7月

## 日本いけばな芸術特別企画 in 彩の国さいたま

金沢21世紀美術館で開催された特

別企画展から8年ぶりに、様々なイベントを盛り込んだ展覧会がさいたま市の埼玉会館で行われた。

立花、生花、投入、盛花などの花式、ごとの展示や、実葉、根など花材、ごとの会場構成になつていて、観る人にいけばなを色んな角度から知つてもらう仕掛けになつていた。また、杜若の葉組や三管筒の生花などの実演をじっくりと解説つきで見る事が出来たり、私達花道家にとつても大変貴重な勉強をさせていた。ただいた。(写真①)



養護学校の生徒達と、女子サッカー選手のいけばな体験の様子が会場で常時上映されていた。(写真②③)





日本の華道を紹介する番組  
「花 知道 答案 中日名师插花課」

中国のインターネットサイト「豆瓣」(douban)の情報番組「豆瓣時間」に協力させてもらつた。日中の華道家のいけばなを花材や器、道具の紹介から、いける過程や技術、心得などを動画で紹介する。12人の40作品を見る料金は298元(約5千円)。文化をちゃんと伝えたいという中国スタッフの真面目さに敬意を表したい。



## 避難生活

先月号の2頁、西日本豪雨を6までとしたのは7日までの間違いです。訂正いたします。

東日本大震災と熊本地震を合せるとおよそ10万人が未だ避難生活をされている。そしてまた西日本豪雨である。他にも各地で起つた自然災害。温かな支援が継続されますよう。可能な限り早く普通の暮らしを取り戻されますように。



プリンスホテル会員誌  
エスコート  
グランドプリンスホテル京都での  
いけばな体験を紹介。宿泊客がお茶  
とお花を体験できる。普通なら習え  
ない先生の指導を受けられる贅沢な  
企画なので、是非問い合わせを。

## 二〇一九年

### 己亥（つちのと い）

干支は全部で 60 種類あり、それぞれに意味がある。

「己」は 10 ある内の 6 番目に対し、「亥」は十二支の最後にあたり、生命が收藏された核を意味し、新たな始まりの準備時期をさす。

そして「己」と「亥」には「土剋水」という一方が一方を凌駕する関係にある。つまりステップアップの大事な時期にあふれる精力が邪魔をする、調子に乗ると落とし穴にはまるということだ。

また干支には「納音（なつちん）」という別の意味も割り当てられていて、「己亥」は「平地木」つまり平地に立つ孤高の木という意味がある。

以上をまとめると、二〇一九年は盛んなエネルギーが飛躍のための準備を邪魔するが孤高の継続力で乗りきる、そんな年ということになる。どんな飛躍をしようか。そのためにはどんな準備が必要か。年頭にあたって考えてみてはどうだろう。いい考えが見つかればあせらずに、でもどことんしつこく諦めず、そしてできるだけ丁寧に進めて行くことが肝心だ。

しつこく諦めず丁寧に、いい仕事をしよう。

## 令和

5 月 1 日、元号が「平成」から「令和」へ変わった。

先日、倉敷で開催された桑原專慶流いけばな展で、岡山県本部の小野樹仙会長が挨拶の中で次のように教えて下さった。

人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ

「令和」にはそんな意味が込められているそうだ。

令和の時代に華道がどんな役割を果たせるか。人々が美しく心を寄せ合えるような花を、皆さんと共にいけてゆきたいと思う。

## 物のこころ 仙溪

昔 年配のお弟子さんに「物にも

心があるんですよ」と言われたことがある。京都で袋物を扱う店をされている、手作りの物へのこだわりを持っていた。作り手の心が物に移り、そこへ使う人の心も重なつていいと。とても上品な籠花入れである。

作者は丹波篠山の箕浦竹甫さん（1934～2010）。田辺一竹斎さんと一緒に師事して技術を習得、篠山特産の雲紋竹を活用した竹工芸作家として活動される。その技術は篠山市の無形文化財に指定されている。

丹波篠山の竹は竹細工に向いている。固すぎず柔らかすぎず。固いと折れるし、柔らかいと虫が食う。そんな地元の特性を生かした竹籠づくりに情熱を注いだ箕浦さん。きっとその箕浦さんの人物に惚れ込んで手に入れられたものなのだろう。そんなことを思いながら眺めていると、籠に対する愛着が増してきた。

籠を思しながら花屋に行くと、3 色のハナショウブが目にとまつた。季節の品格を備えた花だが、過去に籠にいたことがない。この籠の心が私に作用したのかもしれないなど不思議に思う。竹籠を入れた桐箱には「花籠」と書かれていた。雅な心が名前にも込められている。

空海 仙溪

先日テレビで空海が辿った中国の道を紹介する番組を見た。  
空海は774年、讃岐国の郡司の家に生まれ、のち平城京へ上つて猛勉強。19歳からは大学での勉学に飽き足らず山林修行をはじめる。



804年、第18次遣唐使に學問僧として加わるが、空海を乗せた第4船は嵐のため目的地の遙か南の福建に漂着。福州で許可を得て閩江を船で遡り、陸路で仙霞古道を浙江省へ。富春江を下つて杭州に辿り着き、ようやく本来のコースにもどつたことになる。唐の都、長安に着いた空海はわずか2年で千人を超える中から密教の正當な繼承者に選ばれ、帰国後には高野山で真言密教を開き、万民救済につくした。

番組では空海が体験したであろう多様な自然と文化を紹介していたが、その中で一際印象に残つた風景が江郎山だ。高さ300mの2枚岩の隙間は垂直に天を突く。大自然に圧倒されると、人はなんどちつぽけなのかと思う。でも人は自然を糧にして、豊かな文化を育むこともできるのだ。

私の中では江郎山の絶景と二つ真の立花が重なつた。どちらも宇宙の神秘を感じられる。

台風 15 号と消費税

今月から消費税が10%に上がるが、消費税に限らず税の集め方と使われ方は、弱者に優しく若者に活力を与えるようなものであつてほしい。また、千葉県など台風15号が残した爪痕に対して国の充分な支援がなされますように。政治に携わる人には私利私欲ではなく誠実さを第一に考えて頂きたい。

仙溪

「庚」は十干の七番目に当たり、植物の成長が止まつて新たな形に変化しようとする状態をさす。庚は更に通じ、改まる、入れ替るという意味を持つ。

「子」は十一支の一番目で、土中で発芽したまさにその瞬間。子の字は頭の大きな赤ちゃんを象つている。

「五行」で言うと庚は「金」、子は「水」にあたり、この二つは「金生水」という互いを生かす「相生」という関係とされている。

さらに、「納百」という物差しで見ると、今年と来年は「壁上土」という年にあたり、「頑固なまでの不動の精神力を持ち、物事をやり遂げていく」そんな年もある。

自分の中に秘めた志があるなら、今までできっこないと思っていたことをでも、生まれ変わつたつもりでチャレンジしてみる。そんな新たなる年のにしてはどうだろう。

「立花時勢粋」が一六八八年に世に出て、来年で三百三十三年になる。流派の皆さんと力を合わせて、十年ぶりに京都で花展をしたいと考えている。今年はその準備もしなければ、健健康に留意していただき、充実した一年となりますように。

二〇二〇年・令和二年  
庚子（かのえね）

「庚」は一〇一〇年の子年。干支で言えば「庚子」の年だ。

「庚」は十干の七番目に当たり、植物の成長が止まつて新たな形に変化しようとする状態をさす。庚は更に通じ、改まる、入れ替るという意味を持つ。

「子」は十一支の一番目で、土中で発芽したまさにその瞬間。子の字は頭の大きな赤ちゃんを象つている。

「五行」で言うと庚は「金」、子は「水」にあたり、この二つは「金生水」という互いを生かす「相生」という関係とされている。

さらに、「納百」という物差しで見ると、今年と来年は「壁上土」という年にあたり、「頑固なまでの不動の精神力を持ち、物事をやり遂げていく」そんな年もある。

自分の中に秘めた志があるなら、今までできっこないと思っていたことをでも、生まれ変わつたつもりでチャレンジしてみる。そんな新たなる年のにしてはどうだろう。

「立花時勢粋」が一六八八年に世に出て、来年で三百三十三年になる。流派の皆さんと力を合わせて、十年ぶりに京都で花展をしたいと考えている。今年はその準備もしなければ、健健康に留意していただき、充実した一年となりますように。

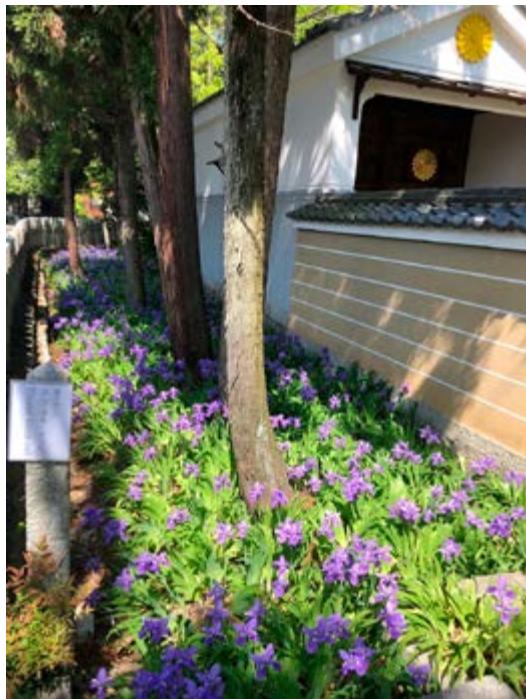
かみごり ようじんじや  
上御靈神社のいちばつ

ハツが植えられ、往時を偲ぶ景色を蘇らせてくださった。

現在のイチハツの景観は、氏子の皆さんによる「いちはつの会」によつて植え替えなどの日頃のお世話をによつて維持されている。

イチハツは古来、厄除け、火除け、

風除けの植物として茅葺き屋根の棟に植えられ、災厄から家を守つてくれる」と信じられてきた。古の花の文化を伝えること、花を大切に育てることは環境にも人的心にとつても良いことである。このことは花をいける私たちこそ大切にしている。



昨年の5月5日に上御靈神社へイチハツを見に行つた。今切り花でイチハツと呼ばれている二オイイリスではなく、本来のイチハツの方だ。  
上御靈神社は相国寺の北に位置し、古くは鴨川から別れた川が境内を通つて御所へ繋がつていて、神社の堀にカキツバタが群生していたそ  
うだ。神社の近くに尾形光琳の屋敷があつたそうで、その当時この地で燕子花(かきつばた)をスケッチしていたかもしけない。

昭和初期に川がなくなり堀の水も干上がりつてカキツバタが消えてしまつたのを憂い、20年ほど前に近隣の氏子有志によつて乾燥に強いイチ



京都文化力プロジェクト  
2016-2020 Vol.4

くらしの文化を楽しむ

（華道）

桑原專慶流十五世家元  
桑原仙溪

自然の美しさを器に凝縮する  
それがいけばなの魅力

自然の美しさを切り取って器に入  
ることで、そこに新しい命が芽生  
える、新たな物語を語り始める。器の  
中の花一輪が、まるでマジックのよ  
うに自然の真理を物語る。それがい  
けばなの魅力です。

心を込めて生けた花が  
人と人の心を結びつける

いけばなの最もすばらしいところ  
は、「和」を作り出せるところにあ  
ると私は考えています。無機質な部  
屋でも花が一輪飾られているだけ  
で、こころに気持ち良い風が吹き抜  
けて、その場の空気がふわりと柔らか  
くなる。誰しもそんな経験をしたこ  
とがあるのではないか。ただそれだけ  
で、その人は想を伝える  
ことができるのです。

千年以上もの間都だった京都に  
は、全国から質の高いモノや技術が  
集出し、豊かな文化が育まれました。  
そうした多様な文化が出会って化学  
反応を起こし、新たな文化が創造さ  
れてきた歴史があります。私の若い  
頃にも異分野交流を通じて自己研鑽  
する機会がたくさんありました。当  
今時代は、そうした機会も心の余  
裕も減っているように感じています。  
豊かな文化もその扱い手である  
一般市民の方々の心が豊かでなければ  
いけばな次代に伝えることはできません。  
京都が多様な文化が混ざり合い、未  
来に新たな文化が生まれるところであ  
つてほしい。私もいけばなを通じて  
それを貢献していくたいと考えて  
います。

そもそも「花を生ける」という文  
化は中国から伝わり、日本で日本の文  
化とともに進化を遂げました。その成  
り立ちには、自然を依り代として崇  
めた自然を敬う心、自然に対しても  
神秘的な魅力を感じる独自の感性が  
影響しています。中でも桑原專慶流  
は、元禄時代（十七世紀）、桑原富  
春軒仙溪によって京都で創流されま  
した。立花の名手だった流祖の仙  
溪は、「型」が重視された当時のい  
けばなの潮流に対し、枠にはまら  
ない自由な気風を大切にしました。  
1688（元禄元）年に仙溪が著し  
ます。

た「立花時勢粧」という8巻からなる花伝書はその後の華道の歴史にも  
大きな影響を与えています。

自然の美しさを器に凝縮して表現  
するのが立花の醍醐味。桑原專慶流  
では、代々植物の持ち味を生かすこ  
とを大切にしながら、流祖の自由闊  
達な風を受け継ぎ、新しいいけば  
なの創造にも挑戦してきました。  
十五世家元を継いだ私も、花を

大切に思い、「どうしたらその花を  
生かせるか」と考えながら花と向  
かって思っています。



## 近況

仙溪

花と器

仙溪

4月から稽古をお休みにしていましたが、5月は花にプリントを添えてお届けし、自宅で自主稽古をすることに挑戦していただいています。いけた花の写真をメールや手紙で送つてもらい批評をお返しするのですが、皆さん初めての試みを新鮮な感じで楽しんで下さっています。

コロナ自粛中に家族総出で家の路地の石を洗いました。黒い小石(那智黒)は表面は綺麗でも、その下は泥がいっぱい。すべての小石を集め溝をタワシで磨き、小石はバケツでピカピカに洗つて元にもどしました。苦労したあの清々しさと充実感を味わっています。

このところ、いけばな誕生以前の花と器について考えている。偶然見つけた石窟内部の写真には花瓶に蓮の花と葉が生き生きと挿されているように見える。その石窟が造られたのは527年。先祖とともに未来での幸せを強く願う思いが込められているようだ(8~9頁)。

仏前に香を焚き、香水をかけ、香花を散らす祈りの姿が、インドからガンダーラ・敦煌(とうこう)中国へと伝わる中で、「人の思い」が加わって、いつしか花と器を出逢わせたのだと想像している。

インドから伝わった蓮に対する清淨なイメージと、中国で先祖を尊ぶ象徴の祭器とが重なり合い、最初は花を散らす代わりに空の器に花を入れたのがきっかけで、香水と花と共に供えることを思いつき、器に水を満たして花を挿すことになったのではないか。花と人との関係から、見えてくるものはー。

いけばな誕生の背景に、壮大な人類の口マンを感じている。

テキスト 686  
2020 年 8 月

テキスト 688  
2020 年 10 月

THE KYOTO

★ 特集

川 知る

■ 出会う

◆ 育てる

Login

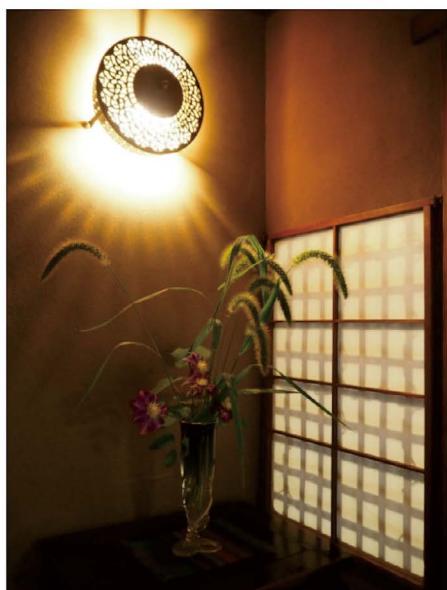
≡

## 文化の未来時評 #5 制御から尊敬へ

#未来デザイン  
—

2020.08.28  
Text by 西村勇哉

人よりはるかに長い歴史を持つ花。その花の生を生かす「いけばな」には何があるのか。花と人との関係から、見えてくるものはー。



THE KYOTO

文化を知る。  
世界を変える。

京都ならではの視点で、文化を知り、未来を考え、育てる。

メディア・サロン・クラウドファンディングを柱とする、文化アートのプラットフォーム。

京都新聞社の新事業として、今年6月から始まったデジタル情報サイト「THE KYOTO」の取材を受け、いけばなへの思いをお話させていただきました。

「花と協力して、何か人をほつとさせる空間を作るのが、いけばな

の究極の姿です。だからこそ、花を敬う気持ちがないいけばなは、僕はいいとは思わない。」

文化の力を未来に生かすためのユニークなサイトです。是非一度、覗いて見てください。

THE KYOTO

文化の未来時評 #5

制御から尊敬へ】↓

インタビューア協力

桑原仙溪

下のQRコードをスマホで読み取りとサイトに行けます。



花を飾る場所 仙溪

花材 糸芭蕉 (芭蕉科)

モンステラ (里芋科)

アンスリウム (里芋科)

花器 ガラス鉢

私の家では仕事柄、常にどこかに花がいけてある。稽古の見本にいけた花や「テキスト」の撮影でいけた花がある時は、あちこちに花を飾っている。少し多すぎるかな?と思つても、置き方を工夫して、稽古に来られた時にできるだけ見てもらえるようにしている。

下の写真はもともと茶室として建てられた部屋なのだが、本来の目的にはあまり使わないこともあり、朱塗りの大きな円卓を置いて常に花を飾っている。お客様には別の座敷にご案内するので、この部屋はほぼ花のための部屋になっている。

改めて考えると、なんと贅沢なことだろう。しかしうつたりした空間だからこそ感じられるものもあるはずだ。花が居心地良く飾られていると、こちらの心も心地よい。シンプルなことだけれど、いけばなどはそんなものなんだと思う。

こまめに水を入れ替え、悪くなつた花や葉を整理し、新鮮な花を加えると再び輝き出すから不思議だ。





仏牙舍利が奉安されている多宝塔

「私は56枚のオーク（ナラ）の落ち葉を写した。その葉脈を見れる限り注視した。かつて水や養分の通路であった生命活動の証である。それは、一枚一枚の落ち葉を通じて行つた命との対話だつた。ドイツの地で私と出会い、遠く日本の鹿王院まで運ばれた56枚の落ち葉たちは、稀有な運命を持っていたのかもしない。」藤井隆也

（鹿王院令和襖絵56面落成記念  
拝観カタログより）

襖には藤井さんがドイツから持ち帰ったナラ（楢）の葉が一枚ずつ描かれていた。そこにはそれぞれの葉の命の気配があつた。居ながらにして森を感じる不思議な体験であつた。

今後も襖絵は見られるそうなので、是非訪れてみてほしい。

鹿王院は足利義満ゆかりの寺で、舍利殿には源実朝が宋から将來したと伝えられる仏牙舍利を奉安する。

テキスト N°651 でもご紹介した藤井氏が56面の襖絵を描かれたのを見せて頂いた。

襖絵制作 藤井隆也

会期 10月30日(金)～11月14日(土)  
会場 鹿王院  
嵐電「鹿王院駅」徒歩4分

鹿王院 令和 襖絵五十六面  
落成記念拝観  
テキスト N°651 でもご紹介した藤井氏が56面の襖絵を描かれたのを見せて頂いた。

## 二〇二一年

令和三年 仙溪

辛丑（かのとうし）  
一二〇二一年は丑年。干支の「辛」と「丑」にあたる。

「辛」は10段階の8番目で、字の辛は刺青の針を表し、痛みを伴う幕引きや辛い衰えを意味する。

「丑」は12段階の2番目で、字の丑は指に力をこめて曲げた形を表し、命の息吹が充満している状態。

「辛」と「丑」は「土生金」という「相生」の関係にあり、相手の力を生かし強め合う。  
「納音」という物差によると今年は昨年と同じ「壁上土」で、地道で堅実、不動の精神。

以上のことからすると、衰退や痛みは大きいが、大きな芽生えを感じる年であり、堅実で強い精神力が求められる。  
まさにコロナ禍による試練が続いているが、こんな時こそ強い生命力と強い精神で、新たな輝きを生み出そうではありませんか。

## 花と器

仙溪

## 京都日本画新展2021

会期 1月29日(金)～2月8日(月)

会場 美術館「えき」KYOTO

JR京都駅・伊勢丹7F

日本画出品 楊喻淇「雨火花」

中国の青銅器の歴史を簡単に紹介したことから、立花が生まれる前の花と器について調べ始めたが、日本花と器に挿花図を探し、中国、インドの遺跡に残された壁画や浮彫に挿花の痕跡をもとめる内に、仏教の供花はいつから瓶に花を立てるようになったのか、などとどんどん興味が膨らんで、なんだか宝探しでもしているみたいだ。

今月号で紹介した中国北方の墓に描かれた瓶花図も大発見である。絵は拙い感じだが、描かれたテーマに心を打たれた。仏のためのものとはいって、様々な花を育てて大事に大事に育てていたに違いない。

そんな瓶花が仏教の供花に加わったのはいつどこからだったのか。まだまだ宝探しは続く。

(写真③)

楊さんは台湾からの奨学生として京都造形芸術大学修士課程に在籍され、現在いけばなを健一郎先生に教わりながら、花の魅力の表現を試みられている。

今回「優秀賞」をとられた作

品は、秋草立花からの印象をもとに描かれたもので、いけばなが彼女の五感を刺激して生まれた新たな芸術世界である。





オンライン講座修了のタイミングでレモン登場！

## 人と花

仙溪

「人が花と在るあたたかさが身に染みる」

昨年12月号で菊の立花に添えられた健一郎の言葉なのだが、原稿を読んだ時に思わず唸らされた。確かにそういう。いけばなの価値はそこにこそあるとさえ思う。

先日、植物園でしゃがみこんで写真を撮っている人を見かけたので行ってみると、か弱い小さな花が咲いていた。「セツブンソウ」の札が近くにあり、解説もつけられていた。

自然の輝きを見つけた喜びと言えば



セツブンソウ  
植物園にて

いいだろうか。少し大袈裟に言うなら生命の神秘に見とれてしまう。

そんな感動を植物園で味わえるのは、植物園の皆さんのお陰である。花を見て、人を感じ、再び感動する。

そんなことを考えていて気づいたことがある。いけばなも同じなのだと。

部屋に花がいけてあると豊かな気持ちになる。花と器が生き生きとしてそこに在り、まわりの空間を活気づかせる。いた人の花への愛情を感じると更に感動が深まる。

そんないけばなでありたいと思つ。



## ツバキ群生林

山口県 萩市  
笠山

(2021年3月18日撮影)

ヤブツバキの群生で有名な萩市笠山は約八千八百年前の噴火でできた火山で、冷え固まつた溶岩（安山岩）が、陸上では照葉樹林や海岸植生、海中では瀬場を支えている。人々はその中から木材や石材、海産物を得ることで文化を育んできた。

ヤブツバキは新や材木として重用され、切り株からは新たな枝が再生し、独特のツバキ群生林が生まれた。

江戸時代には秋城の北東、鬼門の方角にあたるため、毛利藩は笠山一体を立ち入り禁止にし、数百年間自然林になっていたが、明治になって禁止は解かれ、多くの大木は切り倒されたそうだ。

それでも数十種のヤブツバキが五千株、約二万五千本自生している。

群生林の中はツバキだけの世界が広がっていた。全身でツバキを体感できる。

①展望塔に上って群生林を上から見ると、太陽光で葉がキラキラと輝き、幻想的な風景が。

②若むした溶岩と椿の樹林。葉と花が散り積もる。

③大木は切られた後とはいえ、曲がりくねった幹に年輪を感じる。

ひおうぎ  
檜扇

仙溪

扇のような姿に葉をつけるヒオウギは、古より悪い物を追い払う力があると信じられていた。私の想像だが、身につける厄除けの道具としてヒオウギに似せた作つたのが檜扇なのではないだろうか。お雛様が持たれているヒノキの薄板を綴り合わせたあの扇だ。それまではヒオウギの古名「カラスオウギ」と呼ばれていたのが、それ以後ヒオウギと呼ばれるようになった。（のではないだろうか）

もしそうだとすると、檜扇を元に考案された紙扇や扇子も、植物のヒオウギゆかりのものとなる。人と自然の関わりを感じている。

今年もヒオウギの季節がやってきた。力強く晴れやかな姿に生けたい。

二〇二二年

令和四年

壬寅（みずのえ とら）

一〇一二年は寅年。干支の「みずのえ」寅にあたる。

「壬」は10段階の9番目で生命循環の終わりの位置に近く、次の生命を育む準備の時期。字の壬は「はら」と通じ、水の兄とは陰陽五行説の「水の陽」のことで嚴冬、静謐、沈滯を表す。

「寅」は12段階の3番目で生命循環の初めの位置に近く、誕生を表す。寅は弓矢を両手で引き絞る形から生まれた字で、動き初め、胎動といった意味を持つ。陰陽五行説では「木の陽」にあたり、強く大きく成長することも表している。

「壬」と「寅」は「水生木」という「相生」の関係にあり、水が木を育み強くするイメージ。

「納音」という物差によると壬寅は「金箔金」で、傷つきやすい脆さはあるが本来もつてゐる金の資質を生かすために鍛錬すれば成功につながることを意味する。

大きな成長の前段階として、良い資質に磨きをかけて実力を養う、そんな年になりそうだ。まずは自分自身の良いところを再認識しよう。

## 「花の芸術」

立花時勢粧 333年

桑原専慶流いければな展

コロナ禍での流展でしたが、風通しの良い設えでゆつたりした展示にしたため、過去に経験したことがないような花展になりました。

「花を観賞する」ではなく「花と時を過ごす」ような新鮮な感覚を持たれた方も多かったです。

全てのいけばなを横や後ろからも見ることができ、向こうにいけられた花との重なりも心和む景色になつてしていました。

会場入口では次期家元の力強い松一色砂の物が迎え

花となり、会場内では私と副家元の桜の大作が31席のいけばなを見守ります。その31席は各期総替えとなつて、それぞれの期の景色をつくっていました。

私達の3作は6日間毎日水を入れ替えて展示。副家元の桜は次第に花色を濃くし、私の桜は会場で花が咲き、葉が居心地よさそうに広がつていきました。

ご来場下さった皆様に厚く御礼申し上げます。開催が危ぶまれる中、素晴らしい花材が集まつたことに心から感謝しています。

コロナの規制で来られ無かつた皆様とも、ウェブ上で花展の様子を共有できました。全出品作の写真と花

の名前、器の作者名をご覧いただけます。立花時勢粧のことを知つて頂きたいたい思いで作った解説パネルも公開していますので、いつでも覗いてみて下さい。

皆で花をいけることが何か世の中のためになることを願い、入場料全額を京都市に寄付させていただきました。他流の先生方にも入場券を買ってご覧いただきましたが、皆さん快くお越し下さり、また共感のお言葉も多く頂戴しました。いけばな文化が社会を育む方法として、このような花展もあって良いと思います。

いけばなは花と協力することで生き生きとした美をつくりだす芸術なのだと、改めて実感しました。





仙溪が立花で立てた桜の大枝は家元宅の庭に。信楽焼の大壺にいけられた桜とレモンとメイ。

突然あらわれた桜の枝には、猫たちのほかにも時折小鳥がやってきます。



### 第73回 華道京展 「花と遊ぶ」

会期

4月14日(木)～16日(土)

会場

平安神宮額殿

出品 桑原仙溪

～

当流前

前期出品 (詳細は前号参照)

### 平安神宮献花大会

会期

4月7日(木)～12日(火)

会場

大丸ミュージアム(京都)

後流前

期

～

品

出

～

前

号

参

### 岡山県本部主催 桑原專慶流いけばな展(延期)

#### 日本いけばな芸術九州展

会期

4月13日(水)～18日(日)

会場

熊本鶴屋百貨店

後期展 4月16日～18日

出品

桑原仙溪

### 徳島代表いけばな展

会期

4月16日(土)～17日(日)

会場

あわぎんホール

出品

武田慶園 川崎慶富

「花の芸術」展特設サイト  
花展の様子をご覧頂けます。  
[kuwaharasenkei.net](http://kuwaharasenkei.net)

下のQRコード  
をスマートフォンで読み込んでください。



## マンチェスターで活躍中！

イギリスのマンチェスターで、  
IKEBANA 教室が街の人達に  
憩いと安らぎを提供している。

JUNKOさんは桑原専慶流師

範。卒業旅行でイギリスへ行つた人  
健一郎が 5 週間ご厄介になつた人

だ。流派の自然本位の考え方を大  
切にしつつ表現は JUNKO スタ

イル。「花と共に美をつくる」い  
けばなの精神が、アーチスト魂に  
火をつけたようだ。

インスタグラムでその様子を見  
ることができる。

街の広場でいけばな

体験を楽しむ人達。コ

ロナ禍の制限がゆるま

り、身近な花に触れな

がら、創造の喜び樂し

みを味わわれたことだ

ろう。開放的な空間で、

いけばなが人々の心に

優しく語りかける。

JUNKOさんは今、

いけばなでイキイキし

ている。

(写真①②③)



②



①



③

## 「花の芸術2022」作品集

立花時勢 絹解説付き

A4版 128頁

3300円（税込）

立花時勢 絹33年、「花の芸術」  
桑原専慶流いけばな展の作品集を  
つくりました。

ご希望の方は家元事務局へ。

(075 221 2950)





藤井隆也さんのインスタグラムには藤井さんの作品を背景に毎日のい  
けばなが（5年前から一日一作！）。。。日本でもドイツでも、季節の  
一枝を仕事場にいけて楽しめています。@fujiiitakaya

### 藤井隆也氏の アートと挿花

日本とドイツを拠点に創作活動を続いている藤井隆也さんは桑原専慶流の師範でもあります。

ドイツで拾ったオーケの枯葉を拡大して描かれた絵が、京都鹿王院の襖絵として納められています。

昨年に続いて今年も9月に、鹿王院で新作屏風絵の発表を予定されています。期間中はオーケの襖絵も見せていただけます。

藤井さんは5年前からアトリエ近くの自然を撮った写真とともに、1日1点 器に花をいてインスタグラムに投稿されています。

挿花の背景には藤井さんの作品が。自然の中に身を置いて生まれ出される模様と、実際の花が響きあっているような。是非一度覗いて見て下さい。

### 京都市芸術文化協会賞 受賞 桑原仙溪

このたび、京都市芸術文化協会に所属し、芸術文化活動が特に顕著で、芸術文化の向上に多大の功労があつたと認められる者として、表彰していただきました。

受賞に感謝し、今後一層華道の研鑽ならびに発展に尽力してまいります。仙溪



岡山県本部主催  
夏季研修会  
華やいだ暮らしの設え

会期 7月3日(日)  
会場 ライフパーク倉敷

大ホール

参加 約90名  
内容 家元パフォーマンス  
いけばな実習  
「バラをいける」  
いけばな展示

岡山県本部役員

疫病退散の願いをこめて、  
いきいきとした花からパワー

をもらつてもらおうと、岡山  
の先生方が力を合わせてイベ  
ントを開催して下さった。

舞台両端には手作りの床の  
間や応接セットが設置され、  
花の飾り方を解説。中央の大  
作は織姫と彦星にみたてた花  
を即興でいれた。  
厄除けの檜扇にあやかつて  
扇形の葉をもつ竹著我、棕櫚  
竹を使い、邪気を吹き飛ばす  
力強いいけばなになった。

## 植物散歩

仙溪



(右) クサギの花が咲いていた。  
(左) 道を歩くカニ。(和知にて)

途中でいろんな花に出会えるのが山登りの楽しみなのだが、それには時間と体力が必要だ。家から日帰りで気軽に自然を楽しめる場所を訪れて、植物散歩を楽しんでいる。

7月には華道家仲間と六甲山高山植物園に行つた。コアジサイの紫色の花柄に見入り、ギボシの花の蕾が丸くて可愛いかった。

8月には京丹波町和知の「わち山野草の森」を訪れた。九百種の植物が育ち、四季を通して楽しめる。オミナエンが眩しく咲いていた。途中、由良川沿いの田園風景に癒やされ、鮎の塩焼きと地酒も堪能した。別の季節も楽しみである。

## 13～15日 鴨島文化サロン作品展 3年ぶり待望の再開

1974年から鴨島で毎年開催される「作展」が34回目。鴨島鷺島の本丸千手院門前で開かれる。和知の民間の表現場として「はなびで豊かな郷土文化をめぐらす」として、多くの出展者が集まる。昨年は止どひな祭り、発表会や美術鑑賞会が開催された。今年は、本郷にせよ、市にせよ、農小工芸品や手芸品、陶器、漆器、木工品、書道、写真などの出展が多くなる予定だ。徳島市や鴨島町文化サツが主催する企画も、多くの作家による企画も開催される。今年は「花と緑」がテーマ。作展のジャンルは絵画、陶器、漆器、書道、写真、模型、工作など多岐にわたる。また、開催期間は、8月13日～15日と長い期間に亘る。出展料は口頭で決めていたが、前年生じたものと並んで、今年は、徳島市や鴨島町の公的機関に譲れてい

### 民間発表の場 県内草分け ジャンル多彩、ユニークな展示



【写真】「鴨島文化サロンの作品展」は、毎年夏に開催される「作展」の前身。和知の本丸千手院門前にて、多くの出展者が集まる。今年は「花と緑」がテーマ。作展のジャンルは絵画、陶器、漆器、書道、写真、模型、工作など多岐にわたる。また、開催期間は、8月13日～15日と長い期間に亘る。出展料は口頭で決めていたが、前年生じたものと並んで、今年は、徳島市や鴨島町の公的機関に譲れてい

## 徳島だより

毎年お盆の頃、華老の武田慶園先生とお弟子さん達は地域の文化サロン展に大作花をいけ続けておられ、今年で47回目となる。サロンを主宰する藤原茂喜さんは「文化力を高めるには作家が集い発表できる環境が重要」と。貴重な集いの場だ。

実り 仙溪

栗の渋皮煮を頂戴した。鬼皮だけを剥き、渋皮を美しく残すには熟練の技がいる。砂糖で煮るだけのシンプルな作り方だそうだが、飴色の見た目も美しく、柔らかで甘くて美味しい。

ちなみに調べてみると植物学上では鬼皮が果肉で、渋皮は種皮、その内側が種子にあたるので、種を食べていることになる。他にもイチゴは花托がふくらんだもので、表面のつぶつぶが果実にあたるそうだ。一つの花にめしべが百以上あるためにそうなる。

植物が子孫を残す工夫は千差万別だが、種子を宿した「実り」の姿はそれぞれに美しい。見て食べることに加えて、いけて実りを味わっている。